

# 『甲陽軍鑑』をめぐる研究史

——『甲陽軍鑑』の史料論(1)——

黒 田 日出男

## はじめに

本学に奉職しての約一〇年間を、院生・学生諸君と一緒にやっていける課題として、わたしは日本の「一六世紀史」を研究していくことにした。いわゆる戦国期から近世初頭にかけての歴史である。では、どのように。

そのためのアプローチを色々考えたが、一番魅力的なのは「史料論的アプローチ」であろうと言うのが、わたしの結論であった。<sup>①</sup>そこで、三年生の演習では太田牛一の『信長公記』をテキストとし、今年で三年目を迎えている。<sup>②</sup>

この『信長公記』と比較・対比することができる、しかも、「一六世紀史」研究への挑戦を可能にしてくれるテキスト史料はないものだろうか。ちょうど、わたしが研究代表者の「中近世風俗画の高精細デジタル化と絵画史料学的研究」(平成17年度から五年間の予定)が、科研費基盤研究(S)で採択され、その最初の仕事として、『大坂夏の陣図屏風』(大阪城天守閣所蔵)を、各扇の上・中・下を8×10カラーポジフィルム三枚に撮影し(一双で合計三六枚になる)、それを高精細デジタル画像化した。かくして、この屏風の諸場面を分析・読解、そして記述する作業が課

題となる。<sup>(3)</sup> これまでは、一六世紀の戦争の具体相に深入りすることは避けてきたが、そうもいかなかった。そこで、一番ふさわしい文献史料を探していった結果、かの『甲陽軍鑑』へと行き着いた次第である。それを恐る恐る、そして初めてまともに読み込んでいった結果はどうであったか。なんと、『甲陽軍鑑』は〈一六世紀史〉を考察・記述するのに最も良質の史料の一つであるとの「判断」に到達したのであった。

ただし、『甲陽軍鑑』を利用することは容易ではない。以下に示すように、これまであまりにも多くの危惧が表明され続けてきたからである。しかし他方では、『甲陽軍鑑』は〈一六世紀史〉の貴重な証言史料として利用されてきたことも間違いない。

そもそも『甲陽軍鑑』とは、一体、如何なる性質の史料として位置づけられてきたのであろうか。そのことを本格的に論じた研究が、歴史学においてこれまで存在したのであろうか。そして、これまで『甲陽軍鑑』はどのように利用されてきたのか。

従来の『甲陽軍鑑』に関する研究を簡単に振り返ってみると、その史料性格が十分に論じられてきたとはとても言い難いであろう。『甲陽軍鑑』の史料論は未開拓な世界であるように思われる。とすれば、わたしの〈一六世紀史〉研究のためにも、そして『大坂夏の陣図屏風』の読解と記述という科研の研究課題の一つを遂行するためにも、同書の史料論に取り組むことが必須となる。

そこで、この小稿では、『甲陽軍鑑』をめぐる最初の検討作業として、その研究史をわたしなりに辿ることを課題とすることしよう。

## 一 『甲陽軍鑑』研究とその画期

ところで、学部生時代のわたしは、ある先輩から『甲陽軍鑑』は怪しげな軍学の書であり、とても史料としては使えない代物である。もしも使えば致命的であり、歴史研究者としてはやっていけなくなると教えられた。そうした『甲陽軍鑑』の位置づけと評価・評判は、この先輩だけのものでは決してなかった。言わば、日本史学界の「常識」のようになっていたとさえ言えるだろう。以来、わたしは『甲陽軍鑑』とは距離を置き、まともに読むこともなく今日に至ったのである。

このような『甲陽軍鑑』に対する評価と位置づけを端的に示しているのは、実は歴史研究法とか歴史学入門の類である。例示しよう。

その代表的な本が、今井登志喜著『歴史学研究法』（『岩波講座日本歴史』、一九三五年に発表され、のち、東京大学出版会から一九五三年に再刊）であった。本書は、歴史学研究法の入門書として極めて大きな影響力を及ぼした本であるが、そのなかで『甲陽軍鑑』が扱われている。すなわち今井氏は、「方法的作業の一例」（史料批判の実践例）として、天文十七年（一五四八）七月十九日に起こった塩尻峠の合戦について検討している。<sup>④</sup>

この合戦は武田信玄と小笠原長時の衝突であったが、『浜徳蔵氏所蔵文書』・『諏訪神使御頭之日記』・『妙法寺記』・『溝口家記』・『二木家記（壽齋記）』・『岩岡家記』・『小平物語』・『甲陽軍鑑』などの記事と比較・検討して、歴史事実としての同合戦を明らかにされたのであるが、そこでは『甲陽軍鑑』について、「この書は偽書であることが証明されているが、他の史料との関係から当該の記事を全部あげる」とされ、東京大学附属図書館中の明暦二年版本の塩尻峠の合戦に関する記事が挙げられている。但し、その扱いは「甲陽軍鑑は高坂弾正昌信著となっているが、これにつ

いては史学雑誌等に多くの考証があり、偽書たる事が明かにされているので茲に贅言を要しない」とする。『甲陽軍鑑』が偽書であることは所論の前提とされているのであった。

もう一例挙げると、林健太郎著『史学概論』(有斐閣、一九五三年)である。そこでも、「著書の偽作としては武田信玄の臣高坂弾正の作とされている『甲陽軍鑑』などは代表的なものである」とある。

今井・林の両氏は、いずれも西洋史の歴史家なので、このような「偽書」「偽作」の判断は、無論、日本史家の研究に依拠したものであることは言うまでもない。

高名な歴史家の周知の歴史学入門書において、このように、「偽書」「偽作」であると断定されていることが、恐らく先輩の忠告の根拠であったのであろう。やがてわたしも、今井登志喜の『歴史学研究法』を二度、三度と読み、危うい文献であるとの認識を確認することになったのであった。

近代歴史学によって、このように「偽書」「偽作」と断定されてきた経緯のある『甲陽軍鑑』であるから、研究者たちが忌避ないし及び腰の姿勢にならざるを得なかったのは無理からぬことではあった。

しかし、それでよいのであろうか。

前述したように、わたしは、『大坂夏の陣図屏風』に描かれた合戦を分析・読解・記述するという課題に直面して、そのための最良の史料を捜し求めて諸史料にあたった。<sup>(5)</sup>そして、『甲陽軍鑑』に行き着いたのである。

例えば、武家故実の研究にとって、『武家名目抄』は極めて有用な書である。わたしもしばしば利用してきた。『国史大辞典』(吉川弘文館、一九九一年)によれば、『武家名目抄』のことは、次のように記されている(第十二巻二一五頁)。

江戸時代後期に編纂された、武家に関する名称・語彙などを採録し、解説を加えたもの。和学講談所編。文化三

年（一八〇六）十一月幕命により支配方林大学頭述斎から塙（はなわ）保己一に、仁和三年（八八七）から慶長八年（一六〇三）までの実録編纂を仰せ付けられ、併せて武家に係わるものの職名・文書・兵器などすべての名目を類聚し奉るべきよしを命ぜられた。それに伴い、文化五年六月には手当として年間五十兩を支給されている。（中略）『塙検校伝』には「武家名目抄 凡七百卷」とある。『故実叢書』には三百八十一冊として、一応まとめられている。部門を職名・称呼・居処・衣服・公事・文書・歳時・儀式・弓箭・甲冑・刀剣・旗幟・輿馬・術芸・軍陣・雑の十六に分かつ。武家故実の基本的参考書として利用されている。

この『武家名目抄』を用いて、改めて『大坂夏の陣図屏風』の分析・読解に必要な語彙・語句を調べていくと、そこには『甲陽軍鑑』の語彙・語句があまりにもふんだんに採用されていることに驚嘆せざるを得ない。

『甲陽軍鑑』からの豊富な語彙の引用は、『日本国語大辞典』（小学館）などの国語辞書類でも同様であり、『甲陽軍鑑』は、武家故実や国語語彙に関しては第一級の資料とされていることが確認できるのであった。

要するに、『甲陽軍鑑』については、一方で、未だに「偽書」というレッテルがつきまとい、〈一六世紀史〉の研究者を及び腰にさせ続けている状況があり、<sup>6</sup>他方では、戦国から近世初頭の語彙や武家故実研究の用語の宝庫とされているという事実がある。

そこでわたしは、他の研究者と同様に、磯貝正義・服部治則校注『甲陽軍鑑』上・中・下（新人物往来社、一九六五年）を読むことから出発した。丁寧に読み込みはじめて一驚した。なんと魅力的な内容のテキスト！史料であることとか、と。熟読の結果としての、わたしの率直な感想であるが、『甲陽軍鑑』は、恐らく〈一六世紀史〉研究のための最良の史料の一つなのではあるまいか、と感じたのであった。

とすれば、こうしたわたしの感想・感触と、いまだに歴史学の世界を覆っているかに見える『甲陽軍鑑』に対する

不審・疑念との間の矛盾をきっちりと解決・解消していかななくてはならない。それを正面から行うことなしには、『甲陽軍鑑』をまともに使うことは出来ないだろう。

しかし、日本史研究者たち、とは言っても大部分は戦国史研究者であるが、そのほとんどは、『甲陽軍鑑』を中途半端に利用している。その態度は「つまみ食い」と言うべきものであろう。〈一六世紀史〉の研究者であるなら、『甲陽軍鑑』の史料論を突き詰めて行うべきなのではあるまいか。

しかし管見では、県・市・町・村で編纂している自治体史において、『甲陽軍鑑』をまともに採録している『資料編』・『史料編』は見当たらない。これでは、『甲陽軍鑑』は生殺し状態のままにされているだけである。そもそも、『史学雑誌』等では、今井登志喜の述べているような、多くの厳密な考証がなされていて、『甲陽軍鑑』が「偽書」もどきであることは、果たして決着済みなのであろうか。

そこで本稿では、『甲陽軍鑑』の研究史を辿ってみることにしたい。わたしの読解とその「判断」が妥当であるならば、『甲陽軍鑑』は極めて豊穡なテキストであり、〈一六世紀史〉研究に新たな展望を切り開く可能性を秘めている史料のはずなのである。そのような判断に行き着いたわたしにとっては、『甲陽軍鑑』がこのままの状態に置かれていることは、到底納得できるものではなかった。

まず、近代歴史学の出発以降における『甲陽軍鑑』の研究文献リストを示そう。(なお、ここに掲げた文献は、甲斐武田氏や武田信玄・同勝頼等に関する研究のほんの一部でしかない。管見に入ったものの中で、『甲陽軍鑑』の史料論に関連ありそうな研究文献を、わたしなりに選んだ。重要な仕事で落ちているものがあれば、ぜひご教示を得たい。そのうち主要な仕事と思われる八三本については太字にして、番号を付しておく。)

第Ⅰ期

- ① 田中 義成「甲越事蹟考」『史学会雑誌』一編一号、一八八九年
- ② 同 「甲陽軍鑑考」『史学会雑誌』二編一四号、一八九一年
- ③ 同 「信玄謙信竝に髪あり」『史学会雑誌』二編二四号、一八九一年
- ④ 同 「信玄の葬地」『史学会雑誌』二編二四号、一八九一年
- ⑤ 同 「信玄謙信の書画」『史学会雑誌』二編二四号、一八九一年
- ⑥ 同 「信玄病死付秘喪の事」『史学会雑誌』二編二四号、一八九一年
- ⑦ 同 「武田不動」『史学会雑誌』二編二四号、一八九一年
- ⑧ 同 「妙法寺記」『史学雑誌』三編三一号、一八九三年
- ⑨ 同 「武田信玄の生年」『史学雑誌』四編四四号、一八九三年
- ⑩ 同 「武田晴信の感状」『史学雑誌』四編四五号、一八九三年
- ⑪ 同 「武田信玄の風情」『史学雑誌』四編四五号、一八九三年
- ⑫ 同 「板垣信方諫言の事」『史学雑誌』四編四六号、一八九三年
- ⑬ 同 「穴山梅雪」『史学雑誌』五編六号、一八九四年
- ⑭ 渡辺 世祐「武田信玄の信仰及び文芸」『史学雑誌』三〇編一号、大正九年
- ⑮ 同 「信玄の遺骸について」『中央史壇』一〇卷七号、大正一四年
- ⑯ 相田 二郎「武田信玄の秘喪について」『歴史地理』五二卷六号、一九二八年
- ⑰ 渡辺 世祐「信濃に於ける甲越関係」『史学雑誌』三九編一二号、一九二八年

⑫ 同 「武田勝頼滅亡以後の武田家」『歴史地理』五三卷三・四・九号、一九二九年

⑬ 同 「甲陽軍鑑に就て（解題）」『甲斐叢書第四卷 甲陽軍鑑 乾』甲斐叢書刊行会、一九三三年

⑭ 同 「武田信玄の経綸と修養」創元社、一九四三年

栗岩 英治 「龍雲寺の信玄遺骨問題について」『信濃』一期二卷四・五号、一九三三年

⑮ 渡辺 世祐 「甲陽軍鑑に就て（解題）」『武田流軍学全書』全三冊、一九三五年（『甲斐叢書第四卷 甲陽軍鑑 乾』の解説と同文）

井上 幸治 「武田信玄と鉢形・秩父―小田原北条時代に於ける秩父再考―」『埼玉史談』九卷二号、一九三八年  
野村 常重 「武田信玄と関山派の僧」『歴史地理』七一卷二・三号、一九三八年

⑯ 広瀬 広一 「武田信玄伝」紙硯社、一九四四年

## 第Ⅱ期

⑰ 古川 哲史 「武士道の思想とその周辺」『甲陽軍鑑』（岩波文庫）岩波書店、一九五〇年

⑱ 奥野 高広 「武田信玄」吉川弘文館、一九五九年

⑲ 高柳 光壽 「長篠の戦」春秋社、一九六〇年（のち、『新書戦国戦記』6、同社、一九七八年、として再刊）

奥野 高広 「足利義昭と武田信玄」『日本歴史』一五三号、一九六一年

同 「武田信玄の西上作戦」『日本歴史』一九八号、一九六四年

⑳ 磯貝 正義・服部治則校注『甲陽軍鑑』上・中・下、新人物往来社、一九六五年（『改訂甲陽軍鑑』同社、一九

七六年）



②1 清水 茂夫「甲陽軍鑑の周辺」『甲斐史学』特集号、一九六五年

②2 小林計一郎「甲陽軍鑑の武田家臣団編成表について——武田法性院信玄公御代惣人数之事」の検討——『日本歴史』二〇六号、一九六五年（のち、『武田氏の研究』、吉川弘文館、一九八四年、に収録）

同 「軍役衆と兵糧」『日本歴史』二〇八号、一九六五年

同 「武田軍の小荷駄隊」『日本歴史』二〇九号、一九六五年

②3 有馬 成甫「甲陽軍鑑と甲州流兵法」『日本兵法全集1 甲州流兵法』人物往来社、一九六八年（のち『甲州流兵法——信玄流兵法』と改題して、新人物往来社より再刊）

②4 同 「甲陽軍鑑論」『軍事史学』一一号、一九六七年

②5 奥野 高広「『甲陽軍鑑』の史料的价值」『日本歴史』二四〇号、一九六八年

②6 小林計一郎「武田信玄の遺骸を諏訪湖に沈めること」『日本歴史』二四三号、一九六八年

②7 同 「高坂弾正考」『日本歴史』二四五号、一九六八年

奥野 高広「駿河出兵をめぐる信玄と家康と信長」『日本歴史』二五三号、一九六九年

野沢公次郎「軍師山本勘助の疑問と川中島合戦」『甲斐路』特集号、一九六九年

清水 茂夫「武田信玄の御伽衆」『説話文学研究』三号、一九六九年

②8 相良 亨「解説」『日本の思想九 甲陽軍鑑・五輪書・葉隠集』筑摩書房、一九六九年

### 第Ⅲ期

②9 小林計一郎「山本勘介の名の見える武田晴信書状」『日本歴史』二六八号、一九七〇年

③⑩ 佐藤 八郎「山本勘助史料の発見」『甲斐路』一七号、一九七〇年

③⑪ 磯貝 正義『武田信玄』新人物往来社、一九七〇年

植松 又次「信玄の信濃経営と善光寺——とくに善光寺如来について——」『甲斐路』一七号、一九七〇年  
中沢 厚「武田信玄の石投げ隊」『甲斐路』一九号、一九七一年

なかざわ・しんきち「農民逃散と武田氏」『甲斐路』二〇号、一九七一年

③⑫ 上野 晴朗『甲斐武田氏』新人物往来社、一九七二年

③⑬ 石岡 久夫「甲州流兵法学成立」『日本兵法史』雄山閣、一九七二年

奥野 高広「武田左京大夫晴信」『日本歴史』二八六号、一九七二年

新井佐次郎「武田軍の鉢形城攻め」『埼玉史談』二三卷二号、一九七六年

③⑭ 磯貝 正義『定本 武田信玄』新人物往来社、一九七七年（31の補訂本）

③⑮ 酒井 憲二「甲陽軍鑑の版本について」『山梨県立女子短期大学紀要』一〇、一九七七年三月（研究篇の第二章）

福田以久生「御宿監物について」『御殿場市史研究』三号、一九七七年

③⑯ 上野 晴朗『定本武田勝頼』新人物往来社、一九七八年（一九八七年新装版）

磯貝正義編『武田信玄のすべて』新人物往来社、一九七八年

染谷 光広「武田信玄の西上作戦小考——新史料の信長と信玄の文書——」『日本歴史』三六〇号

奥野 高広「武田信玄二度の西上作戦」『日本歴史』三六八号、一九七九年

③⑰ 腰原 哲朗「『甲陽軍鑑』解説」『甲陽軍鑑（上）』原本現代訳、教育社、一九七九年

同 『甲陽軍鑑（中）』原本現代訳、教育社、一九七九年

同 『甲陽軍鑑（下）』 原本現代訳、教育社、一九七九年

③⑧ 酒井憲二編『甲陽軍鑑』 古典資料類従二〇〇～二二三、勉誠社、一九七九年三月

#### 第Ⅳ期

③⑨ 酒井 憲二「甲陽軍鑑末書について」『図書館短期大学紀要』一七号、一九八〇年三月（研究篇の第四章）

④⑩ 同 「写本と版本の一つの谷間―甲陽軍鑑の場合―」『論集国語学』桜楓社、一九八〇年一〇月（研究篇の第五章）

④⑪ 同 「甲陽軍鑑の成立と伝来をめぐって」『甲陽軍鑑』研究編、教育社、一九八〇年十一月（研究篇の第一章）

山中 恭子「中世の中に生まれた近世―戦国大名武田氏の場合」『遙かなる中世』四号、一九八〇年

④⑫ 酒井 憲二「甲陽軍鑑末書について（承前）」『図書館短期大学紀要』一八号、一九八一年一月（研究篇の第四章）

④⑬ 同 「甲陽軍鑑の写本について」『国語史への道』三省堂、一九八一年六月（研究篇の第三章）

奥野 高広「武田信玄の最後の作戦」『日本歴史』三九三号、一九八一年

柴辻俊六編『武田氏の研究』（戦国大名論集）、吉川弘文館、一九八四年

④⑭ 酒井 憲二「中近世における一種の仮名遣について（上）」『語文』六〇、一九八四年六月（研究篇の付章）

④⑮ 同 「中近世における一種の仮名遣について（中）」『語文』六一、一九八五年二月（研究篇の付章）

奥野 高広「武田信玄と四辻季遠」『日本歴史』四四〇号、一九八五年

④⑯ 上野 晴朗『山本勘助』新人物往来社、一九八五年

④⑦ 酒井 憲二「中近世における一種の仮名遣について（下）」『語文』六一、一九八五年六月（研究篇の付章）

④⑧ 同 「新資料『甲陽軍鑑末書』について(1)」『季刊日本思想史』二五号、一九八五年七月

④⑨ 同 「新資料『甲陽軍鑑末書』について(2)」『季刊日本思想史』二六号、一九八六年五月

⑤⑩ 同 「中世国語資料としての『甲陽軍鑑』」『文学』五四卷一〇号、一九八六年一〇月（研究篇の第六章）

⑤⑪ 同 「中世音韻資料としての『甲陽軍鑑』」『図書館情報大学研究報告』五一二、一九八七年二月（研究篇の第六章）

#### の第六章）

⑤⑫ 同 「『甲陽軍鑑』の後加部分の言語的特長」『文学』五五卷六号、一九八七年六月（研究篇の第七章）

小和田哲男『武田信玄―知られざる実像』立風書房、一九八七年

奥野 高広「関東人未練―武田信玄の証言」『日本歴史』四七六号、一九八八年

下山 治久「武田信玄の小田原攻めについて」『武田氏研究』三号、一九八八年

須藤 茂樹「武田信玄の西上作戦再考」『武田氏研究』三号、一九八八年

奥野 高広「武田氏と宮廷貴族」『日本歴史』四八八号、一九八九年

⑤⑬ 酒井 憲二「『甲陽軍鑑』の語彙一斑」『語文』七七、一九九〇年六月（研究篇の第六章）

⑤⑭ 同 「『甲陽軍鑑』の方言」『調布日本文化』二、一九九二年三月（研究篇の第八章）

⑤⑮ 同 「翻刻『甲陽軍鑑末書下巻之上』」『調布日本文化』三、一九九三年三月

⑤⑯ 磯貝 正義「甲陽軍鑑」『日本の歴史書一二〇選』秋田書店、一九九三年

⑤⑰ 酒井 憲二「中世末の言語の揺れ」『調布日本文化』四、一九九四年三月

⑤⑱ 同 「甲陽軍鑑大成」1 本文篇上、汲古書院、一九九四年四月

- ⑤⑨ 同 「甲陽軍鑑の語彙」『語文』八九、一九九四年六月（研究篇の第九章）
- ⑥⑩ 同 『甲陽軍鑑大成』2 本文篇下、汲古書院、一九九四年八月
- ⑥⑪ 同 『甲陽軍鑑大成』3 索引篇、汲古書院、一九九四年十二月
- ⑥⑫ 太向 義明 「編著史料と戦史の取り扱いを考える―長篠の合戦を材料にしたひとつの試み―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第5集、一九九四年
- ⑥⑬ 酒井 憲二 『甲陽軍鑑大成』4 研究篇、汲古書院、一九九五年一月
- ⑥⑭ 同 「改稿・中世末の言語の揺れ」『調布日本文化』五、一九九五年三月
- ⑥⑮ 山室 恭子 『群雄創世紀』朝日新聞社、一九九五年四月
- ⑥⑯ 酒井 憲二 「信玄をとりまく文学の世界」『武田氏研究』一五号、一九九五年五月
- ⑥⑰ 同 「中世末の同義語一斑」『語文』九四、一九九六年三月
- ⑥⑱ 同 『甲陽軍鑑大成』5 影印篇上、汲古書院、一九九七年一〇月
- ⑥⑲ 同 『甲陽軍鑑大成』6 影印篇中、汲古書院、一九九七年十二月
- ⑦⑰ 同 『甲陽軍鑑大成』7 影印篇下、汲古書院、一九九八年一月
- ⑦⑱ 太向 義明 『長篠の合戦―虚像と実像のドキュメント』山梨日々新聞社、一九九六年
- 太向 義明 「戦国合戦史料としての近世軍記物の一標本―長篠の日記に見られる『甲陽軍鑑』等の踏襲について―」『武田氏研究』一六号、一九九六年
- 太向 義明 「参謀本部が教えた武田の合戦―日本戦史・三方原役と長篠役―」『武田氏研究』一八号、一九九七年

年

⑦② 酒井 憲二『甲陽軍鑑』作者の謎―小幡景憲と高坂弾正』『歴史読本』一九九八年五月号（のち、『老国語教師の「喜」の字の落穂拾い』笠間書院、二〇〇四年、に収録）

⑦③ 笹川 祥生『甲陽軍鑑』から『武田軍記』へ』『戦国軍記の研究』和泉書院、一九九九年

⑦④ 笹本 正治『甲陽軍鑑』に見る夢』『日本文学』四八巻七号、一九九九年

⑦⑤ 酒井 憲二『甲陽軍鑑』のことばをめぐって』『武田氏研究』二〇号、一九九九年

⑦⑥ 『山梨県史』資料編四 中世一 県内文書、山梨県、一九九九年

太向 義明『武田騎馬隊像の形成史を遡る』『武田氏研究』二二号、一九九九年

⑦⑦ 鴨川 達夫『武田信玄奏上写（解説）』『皇室の至宝 東山御文庫御物4』毎日新聞社、二〇〇〇年

⑦⑧ 『山梨県史』資料編六 中世三上 県内記録、山梨県、二〇〇一年

⑦⑨ 太向 義明『甲陽軍鑑』研究の現状と課題』『定本・武田信玄』高志書院、二〇〇二年

⑧① 『山梨県史』資料編六 中世三下 県外記録、山梨県、二〇〇二年

石川 博『伝承の中の武田信玄』『定本・武田信玄』高志書院、二〇〇二年

⑧① 酒井 憲二『甲陽軍鑑』の伝写に見る中近世移行期の語詞』『国語と国文学』八〇巻二号、二〇〇三年

柴辻 俊六『武田勝頼』新人物往来社、二〇〇三年

同 『戦国期武田氏の京都外交―本山系寺院を中心に』『駒澤大学史学論集』三三号、二〇〇三年

鴨川 達夫『武田信玄の自筆文書をめぐって』『山梨県史研究』一二号、二〇〇四年

⑧② 橋本 政宣『正親町天皇宸筆の武田信玄書状』『書状研究』一七号、二〇〇四年

⑧③ 『山梨県史』資料編四 中世二 県外文書、山梨県、二〇〇五年

『よみがえる武田信玄の世界』山梨県立博物館開館記念特別展図録、二〇〇六年

右に示したように『甲陽軍鑑』研究は、ほぼこの四期に分けられるであろう。

第Ⅰ期は、明治時代から敗戦までの時期である。田中義成の①～⑦などの研究に始まり、その弟子である渡辺世祐の⑧・⑨・⑪～⑮の諸研究などで終わる。日本の近代史学による『甲陽軍鑑』の史料性格についての定説なるものは、基本的には、田中義成の②「甲陽軍鑑考」に代表される諸論考によっているのであり、次章において検証・検討を試みることにしたい。第Ⅰ期の全体を眺め渡して見れば、田中義成とその帝国大学での弟子にあたる渡辺世祐が、この時期をリードしていたことは明瞭であろう。

第Ⅱ期は、戦後から一九七〇年までである。この時期の『甲陽軍鑑』論をリードしたのは、高柳光壽・奥野高広・磯貝正義・小林計一郎・有馬成甫の五人であった。

高柳の見解は、⑬や『青史端紅』（新書 戦国戦記1、春秋社、一九七七年）・『三方原の戦』（新書 戦国戦記5、春秋社、同年）などに述べられている。奥野の仕事は、⑮の『武田信玄』に代表されるが、そのほかに数多くの論文を書いており、『甲陽軍鑑』の史料性格についてのかれの見解は、例えば⑮論文に示されている。磯貝は、服部治則との共同作業によって、初めて明暦版本を底本とし、『甲陽軍鑑伝解』と対校して綿密な校訂と詳細な注を付した⑳の『甲陽軍鑑』（新人物往来社、一九六五年）を完成させた。その功績は大きい。現在でも、『甲陽軍鑑』といえば、本書を思い浮かべる者が大部分であろう。『甲陽軍鑑』の史料性格についての磯貝の基本的な見解は、⑮論文や③④（③④）の著書に見られる。また、小林は、②②・②⑥・②⑦などの一連の論文によって、『甲陽軍鑑』の史料性格の解明に寄与したのであった。

以上の論者は、概ね第Ⅰ期の田中義成の『甲陽軍鑑』理解を前提にしている。次章以降で、その点の検証をしてくことにしたい。

それに対して、兵法・軍学の研究者である有馬成甫は、②③・②④論文を発表して田中に始まる定説に対する率直な批判を提出した。その主張は十分に尊重されるべき指摘であったが、奥野による短い反論(②⑤)が出されただけに終わり、定説を覆すには至らなかった。

なお、史料論とは別に、古川哲史(①⑦)や相良亨(②⑧)らの倫理思想家たちが、『甲陽軍鑑』の内容と価値を重視し、その思想的分析・読解に努めていることにも注意すべきであろう。『甲陽軍鑑』を熟読玩味して、その思想内容の把握に努めたかれら倫理思想家たちにとって、それは極めて良質なテキストであったのであり、日本史家のような『甲陽軍鑑』理解とは、はっきりと距離を置いたものであった。但し、とは言え、田中以来の日本史研究者たちの『甲陽軍鑑』理解を真正面から批判する論陣を張ることはなかったのである。

第Ⅲ期は、一九七〇年から一九七九年までの一〇年間である。小林の②⑨論文や佐藤八郎の③⑩論文に示されているように、一九七〇年には、それまで虚構(フィクション)ではないかとさえ思われていた山本勘助の存在を証明する文書が、北海道で見つかったからである(「(弘治三年)六月廿三日付武田晴信書状」『山梨県史』資料編5、一頁、板井家文書一号文書)。

かくして『甲陽軍鑑』の虚構性や偽書性を強調してばかりいた、これまでの『甲陽軍鑑』理解に対する一定の反省や批判の動向が生み出されたのであった。

とくに上野晴朗は、それまでの定説に依拠した『甲陽軍鑑』理解(③②)の著書『甲斐武田氏』を変更し、③⑥の著書『定本武田勝頼』を書き、第Ⅳ期には④⑥の『山本勘助』などを発表して定説を批判し、『甲陽軍鑑』の活用を試みてい



る。しかし、この文書の出現によって、研究者たちの『甲陽軍鑑』の利用の仕方に大きな転換が見られたかと言えば、そうではなかった。ほとんどの研究者の『甲陽軍鑑』の利用は、③④(③①)の磯貝の著書に代表されるように、依然として否定的・抑制的であり続けていた。

そして第Ⅳ期は、一九八〇年から現在までである。前掲リストで明らかのように、この時期において、研究上の最も重要な進展をもたらしたのは、国語学者の酒井憲二であった。かれは『甲陽軍鑑』研究をライフワークとし、一九七七年から一連の『甲陽軍鑑』論を発表し始める。第Ⅲ期の③⑤・③⑧の版本研究に始まり、第Ⅳ期の『甲陽軍鑑』に係わる研究の大半は酒井の仕事であり、その精力的かつ地道な研究の成果は、ついに⑤⑧・⑥①・⑥③・⑥⑧・⑦①の『甲陽軍鑑大成』全七巻(汲古書院、一九九四～一九九八年)に結実し、わたしの判断では、『甲陽軍鑑』論は一気に新たな研究段階へと引き上げられたのであった。少なくとも、『甲陽軍鑑大成』によって、われわれは『甲陽軍鑑』の確実な本文と極めて有用な索引を、初めて共有出来ることになったのである。

以上、四期を概観したが、歴史学研究における『甲陽軍鑑』の理解が根本的に変化・発展してきたかと言えば、否である。渡辺世祐・高柳光壽・奥野高広・磯貝正義といった大先輩から、柴辻俊六<sup>⑧</sup>・小和田哲男<sup>⑨</sup>・笹本正治<sup>⑩</sup>などのわたしにとって同年輩の中心的研究者たち、そして近年の太向義明の発言に至るまでの諸論文・著書の記述の中では、依然として一八九一年に発表された田中義成の小論②の「甲陽軍鑑考」の判断が定説的位置を占めているかに見える。これは驚くべき「呪縛」と言わねばならない。

磯貝正義・服部治則校注『甲陽軍鑑』上・中・下(②①)の本文から、酒井憲二氏の『甲陽軍鑑大成 本文篇』上・下巻(⑤⑧・⑥①)の本文と『甲陽軍鑑大成 索引篇』(⑥①)の活用へと、直ぐに研究の立脚点を移動させたわたしにとっては、これは信じがたい研究史的状况であった。

そこでまずは問いたい。田中義成の論文「甲陽軍鑑考」(②)は、果たして堅牢・堅固な考証の産物なのであろうか。次なる章では、この論考の批判的検討を試みるとうしよう。

## 二 田中義成「甲陽軍鑑考」とその批判―第I期の近代史学とその史料論

前述したように、『甲陽軍鑑』の史料性格を断定し、研究者たちの『甲陽軍鑑』利用の姿勢を決定づけた起点・基点は、田中義成の論文「甲陽軍鑑考」(②)にあった。<sup>(1)</sup>それは、まだ誕生して間もない史学会が発行した歴史学の学術誌『史学会雑誌』の一四号(一八九一(明治二四)年)に掲載された論文である。

しかし、どんな大論文なのかと期待することなかれ。費やされたのは『史学会雑誌』のたったの五頁強なのである。豊穡かつ複雑そして大部なテキストである『甲陽軍鑑』について、その史料性格を論ずるには、あまりにも短い論文であると言わねばなるまい。

無論、論文はただ長ければ良いというものではない。肝心なのは、周到・正確かつ明快なことである。しかし、『甲陽軍鑑考』では果たして論証が十分になされたのであろうか、また、その論拠は正確であったのだろうか。

この小論文は、以後の『甲陽軍鑑』の史料性格を決定づけたのであるが、奇妙なことに、その考証が周到なものと言い得るのか、結論は果たして成り立つのかという批判的検討が本格的になされたことは、これまでになかった。そもそも、『甲陽軍鑑考』とはどのような論文なのか。

まず、『甲陽軍鑑考』の内容をわたしなりに整理すると、次の三点にまとめられる。第一は、『甲陽軍鑑』についての江戸時代の諸説を整理したうえで、田中自身の『甲陽軍鑑』論を結論的に示したものであり、第二は、『甲陽軍鑑』

の記述の信憑性をめぐる検討であり、七点の誤謬を指摘している。そして第三に、田中が『甲陽軍鑑』の「綴輯者」であるとした小幡景憲について簡単に論じている。

第一の部分では、まず『甲陽軍鑑』が、

i 法度之卷（信玄五十七ヶ条等ヲ記ス）、ii 犂牛之卷（当時諸將ノ成敗ヲ論ス、犂牛ハ尾ニ劍アリ、自ラ甜リテ舌ヲ傷ク、法華経ニ出ツ、愚人ノ自ラ用ヒテ禍ヲ取ルニ喩フ）、iii 人数積之卷（人数ノ制ヲ記ス）、iv 合戦之卷（信玄二代ノ合戦ヲ記ス）、v 石水寺物語（信玄ノ物語ヲ記ス、甲府本城ノ北ニ石水寺山アリ、支城ヲ設ク）、vi 軍法之卷（信玄ノ軍法ヲ記ス）、vii 公事之卷（政刑等ヲ記ス）、viii 将来之軍記（勝頼ノ事蹟ヲ記ス）

の八種で構成されているとし、毎巻に高坂弾正の署名があり、天正六年以下は、その甥姪春日総次郎（惣二郎）が続成したと記されているとする。

次に田中は、『甲陽軍鑑』の作者名と成立時期をめぐる江戸時代の諸説を整理し、次の三説が提出されていたとする。

余ヲ以テ之ヲ観ルニ、小幡ノ綴輯ニシテ、其本ク所大凡三アリ、曰高坂ノ遺記、曰関山僧ノ記、曰門客ノ説ナリ、而シテ之ニ雜フルニ己ノ見聞スル所ヲ以テスルニ似タリ、何トナレハ道牛事歴（景憲ノ自記ニテ、道牛ハ其号ナリ）ニ拠ルニ景憲ノ父祖ハ高坂ノ部下ナレハ、或ハ其遺記ヲ伝ヘタルカ、石水寺物語ノ中、晴信ノ言行ヲ記スル条ニハ、間々実説ト認ルモノアリ、遺記ノ文或ハ是ナリ、山本勘介ハ山県昌景ノ一部卒ニ過キズ、而シテ本書極メテ之ヲ推尊シ、晴信ノ軍師トナスハ、蓋関山僧ノ記ニ出ツ、又景憲伝（正保四年門人等ノ記スル所）ニ「景憲天性不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>人之宇下<sub>一</sub>、有<sub>下</sub>睥睨<sub>二</sub>燕雀<sub>一</sub>之知、慕<sub>二</sub>鴻鵠<sub>一</sub>之志<sub>上</sub>、唯所<sub>レ</sub>願先君信玄公創業垂統之規矩、殊軍旅之制法詳<sub>レ</sub>之、故甲信両国士普入<sub>二</sub>其門<sub>一</sub>、尋<sub>二</sub>探故実<sub>一</sub>、委曲記<sub>二</sub>録之<sub>一</sub>、悉綴<sub>二</sub>集其語<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>五十帖<sub>一</sub>、名号<sub>二</sub>甲陽軍

鑑」トアレハ、門客ノ説ニ取ルコト亦明ケシ、而シテ景憲ノ筆ナルハ道牛事歴ト同一文体ナルヲ以テ知ルヘシ、而シテ之ヲ高坂ニ托セシナリ、其世ニ行ハレシハ寛永ノ頃ヨリト見エ。畠山入庵寛永十二年ニ之ヲ讀ミシコト、続武者物語ニ見エ、同十五年書写ノ元就記ニモ之ヲ引ケリ、刊本ハ明暦板ヲ以テ最首トシ、異本十八種アリト、甲斐国志ニ見ユ、

すなわち田中は、『甲陽軍鑑』は小幡景憲の「綴輯」になるものであるとし、そのソースを三つ想定している。一つは、「高坂弾正の遺記」であり、石水寺物語に記された晴信（信玄）の言行には、間々実説と認められるものがあるのは、この遺記によるのであらうとする。二つ目は、山本勘介について『甲陽軍鑑』が極めて「推尊」しているのは、勘介の遺児である「関山僧の記」によるのであらうとする。三つ目には、正保四年に門人らによって書かれた『景憲伝』の記述に依拠して、「門客の説」を取ることは明瞭であるとする。そしてそれらをベースにして、小幡景憲自らの見聞を書き加えて成ったものが、『甲陽軍鑑』だと言う。しかし、このような簡単な指摘だけでは、小幡景憲がなした『甲陽軍鑑』の「綴輯」作業とはいかなるものであったのか、全く不明というしかないのである。

なお田中は、『甲陽軍鑑』が小幡景憲の筆になることは、景憲の自記『道牛事歴』と同一文体であることによって判断できている。この判断も、はたして妥当であらうか。

『国書総目録』（岩波書店）及び『古典籍総合目録』（同書店）によれば、『尾畑道牛事歴』とは『景憲物語』のことであり、田中が当然利用したと考えられる内閣文庫（国立公文書館）には、次の五本がある。

『小畑道牛事歴 全』一冊（昌 一五八―四四五）

『景憲物語 一名景憲軍記抄 全』一冊（昌 特四八―一一）

『景憲軍記抄 景憲物語』一冊（昌 一七〇―二三八）

『小幡道牛事歴』一冊（内 一五八―四二一）

『景憲自記』一冊（内 一七〇―二五六）

以上の五本を閲覧して『甲陽軍鑑』の文体と比較してみたが、私見では、いずれも『甲陽軍鑑』本文とは明瞭に異なる文体である。<sup>12</sup>恐らく田中は、十分な文体比較を行ったわけではなかったのではあるまいか。

かくして、田中の第一の部分についての仮説は、わたしの率直な判断では、いきなりの断定に近く、とても説得力のあるものとは看做し難い。少なくとも、今日の研究者に要求されている論証の水準からすれば、田中は、説得力のある考証や論証を全くしていないと言うべきであろう。

そもそも田中は、『甲陽軍鑑』の諸本に関しても、『甲斐国志』に依拠して「異本十八種」があるとしているだけであり、写本や版本を比較する作業を行った形跡は全くない。近代歴史学黎明期の田中には、そうした書誌学的ないし文献学的手続きが欠如していたか、ないしは不十分だったのであろう。

とすれば、田中の第一部分の論断は、今日の書誌学・文献学にとっても、そして日本史学にとっても、到底認められない、ないしは説得力のない仮説の一つなのである。

第二部分の「甲陽軍鑑考」の次のような論述の検討に進もう。

蓋本書編纂ノ主旨ハ、甲州軍法ヲ伝フルニ在リ、故ニ軍鑑ト曰フ、（信玄全集二モ、卷中ニハ甲陽軍鑑全集トアリ、）其合戦ノ卷ニ至テハ往々英雄ヲ借りテ兵法ヲ説クモノアリ、後世史氏認メテ事実ト為シ、之ヲ史編ニ載スルニ至ル、今其誤謬ノ最モ大ナルモノハヲ挙ケンニ、(1)天文十年信虎民心ヲ失ヒ、国ヲ治ルコト能ハス、晴信已ムヲ得スシテ之ヲ駿河ニ送り、今川義元ニ托ス、信虎諾シテ行クコト、信虎・義元ノ書牘及妙法寺記・諏訪神社記録ニ明ナリ、而シテ本書之ヲ天文七年ニ係ケ、父ヲ逐フトナス、後人從テ狂髡ト呼フニ至ル、(2)晴信ノ村上義

清ヲ破リ、信濃北部ヲ併ハス、天文二十二年ニシテ、亦妙法寺記・二木壽齋記ニ詳ナリ、本書以テ十四年トス、  
(3)小笠原長時ヲ破リ、信濃南部ヲ併スハ、天文十八年ニシテ、二木壽齋記・小笠原歴代記ニ出ツ、本書以テ二十年トス、年月の錯繆スラ此ノ如シ、随テ前後矛盾シ、殆ト条理スベカラス、(4)又晴信ノ削髮シテ信玄ト号スルヲ、天文二十年二月トスレト、永祿元年閏六月十日マデノ文書ニハ、皆晴信トアリ、同二年十一月ノ文書ヨリ信玄ト書スレハ、其法名ヲ命セシハ、永祿初年ナルコト明ケシ、而シテ猶髮ヲ去ラサリシト見エ、高野山ニ画像アリ、其弟信廉ノ筆ニテ晩年ノ容ナリ、頂後僅ニ禿髮ヲ結ヘリ、蓋其志織田氏ニ代リ、海内ニ主盟タラント欲シ、猶枯皓ノ余ヲ蓄フル歟、蓋仏戒ヲ受レハ輒チ法名ヲ命ス、必シモ髮ヲ去ラス、上杉謙信モ亦然リ、但天正四年僧大円ノ喝ニ、「晩入瑞雲授衣授戒、円贖浮屠相」トアレハ、或ハ死前二三年初テ髮ヲ除キシナラン、(5)又信玄ノ死スル諏訪湖ニ沈ムトスレト、其墓ハ甲斐恵林寺(東山梨郡松里村)ニ在リ、同寺現ニ葬時ノ偈文ヲ存ス、其文ニ抛レハ城中ニ殯スル三年ニシテ喪ヲ発シ、恵林寺ニ葬ルナリ、後人之ヲ詳ニセス、從テ荒怪ノ説ヲ捏造セシ歟、(6)大内氏ノ亡ハ天文二十年ナリ、山本勘介之ヲ天文十六年ニ言ヒ、(7)松永久秀ノ亡ハ天文五年ナリ、高坂之ヲ天正三年ニ言フノ類ニ至テハ、鹵莽モ亦極レリ、

この第二の部分で田中は、『甲陽軍鑑』の主旨は「甲州軍法」を伝えることにあるとし、年月日の誤りを中心に『甲陽軍鑑』の記述のうちの大きな誤謬を七点指摘している。この部分は、『甲陽軍鑑』が「史書」として失格であることを決定づけた部分であるが、その指摘が正確かつ妥当であるかと言えば、否である。

まず、(1)の父信虎追放劇についてであるが、渡辺世祐の研究<sup>13)</sup>などによって明らかにされているように、この事件についての田中の解釈は誤りである。

(4)は晴信が剃髪して信玄を号するようになった件に関してであるが、これも渡辺の指摘があり、田中の批判には問

題がある。<sup>(14)</sup>

(5)の信玄の遺言についての批判は、田中が『甲陽軍鑑』本文を不十分・不正確にしか読んでいないことを示している。『甲陽軍鑑』によれば、信玄は諏訪湖に沈めよと遺言したが、宿老たちは、これだけは守らなかったと記されており、田中の批判は誤解によるものである。<sup>(15)</sup>

(6)と(7)は、大内氏と松永久秀が滅亡した年を『甲陽軍鑑』が間違えているとの指摘であるが、しかし、『甲陽軍鑑』は、遠国のことについては正確な情報がないとして、誤謬の可能性を断っており、これをもって「鹵莽モ亦極レリ」とすることは出来ない。むしろ、(7)に関しては、松永久秀の滅んだのは「天正五年」のことであるのに、田中は「天文五年」のこととしているのである。このような小論であるのに、年号の過ちを犯しているのはどうしたことであろうか。

要するに、田中は『甲陽軍鑑』の七点の誤謬を指摘しているが、文句なく当たっているのは(2)と(3)に過ぎず、(4)には問題があり、(1)・(5)・(6)・(7)に至っては、田中のほうが誤りを犯していると言わなければならない。このように見ると、田中の『甲陽軍鑑』批判は、基本的には、合戦等の出来事が何時起こったかという年代記的（絶対年代的）な正確さという基準によるものであり、それは『甲陽軍鑑』の史料性格をはかるにはふさわしくない「物差し」であったと言わなければならない。恐らく田中にとって、合戦や事件とそれが起こった年月日を確認するための史料としては、『甲陽軍鑑』は余りにも誤謬が多いものであり、「史書」としては落第としたのであろう。

しかし、そうした批判を行う前になすべきは、『甲陽軍鑑』とは一体如何なるテキストであるのか、どのような性質の史料なのかを、正面から問いかけることであつた。その作業が本格的になされた後にはじめて、史料として如何に利用すべきか、さらには活用できるのかを論ずることが出来るはずなのである。

第三の部分は、田中が「綴輯」者と判断した小幡景憲とその門人等に関する記述であり、次のように書かれている。

或ハ云ク此書モト未定稿ナルヲ、小幡ノ門人私ニ謀リテ梓行ス、景憲之ヲ悔ユト、然レ氏韜略ノ得失ヲ論シ、器制ノ利害ヲ講スルニ至テハ、実ニ近古兵書ノ祖ナリ、小幡氏ハ世々武田氏ニ仕フ、景憲天正元年ニ生レ、武田氏亡フルニ至リ、徳川家康ニ仕フ、文禄四年脱シテ四方ニ游ヒ、兵術ヲ練修シ、兼テ禅理ヲ研ス、故ニ本書ニ仏語多シ、関原ノ役、井伊直政ニ隸シテ功アリ、大坂ノ役又款ヲ家康ニ投ス、而シテ猶武田氏ヲ念ヒ、為メニ其墓ヲ修メ、景德院（甲斐東八代郡田野ニアリ、勝頼ノ墓所）ノ永続ヲ謀ル、晩年心ヲ著述ニ潜メ、本書ノ外龍書・虎書・豹書ヲ撰ス、寛文三年二月十五日歿ス、年九十一、恵林寺ニ塔アリ、徒弟甚盛ニシテ、北条氏長・山鹿義規輩出ス、而シテ後ノ本書ヲ祖述スルモノ、甲陽合戦伝記（五冊）・甲陽合戦日記（一冊）・甲陽雜記零篇・甲陽合戦覚書（一冊）・甲信発向記（一冊）・甲陽軍鑑評判等（一冊）アリ、而シテ宇佐美定祐ノ甲越五戦記校正ハ、本書ヲ駁シテ反テ誤ルモノナリ、

この記述は、小幡景憲の伝記的記述としては妥当なのであるが、『甲陽軍鑑』の「綴輯」者としての小幡景憲は全く見えてこない。晩年の景憲が著述に専心したことは事実である。しかし『甲陽軍鑑』は、寛永年間にはすでに読まれているテキストであり、伝記とは齟齬する。景憲は、どのようにして元になるソースを集め、それらに私見を加えた上で『甲陽軍鑑』を「綴輯」することが出来たのであろうか。この肝心な経緯については、田中は全く論じていないのである。

田中の小論「甲陽軍鑑考」は以上のような内容であり、それは周到な考証がなされている論文とは到底言い難いものであった。「甲陽軍鑑考」は、田中にとっても、日本の近代歴史学にとっても、その草創期の考証的小論の一つに過ぎず、しかも、今日の研究水準からすれば、極めて不十分・不徹底な考証にとどまった論文に過ぎなかったのでは



る。

しかし、「甲陽軍鑑考」(②)の威力は絶大であった。「東京帝国大学教授」田中義成「博士」の出した結論とされ、その権威によって、『甲陽軍鑑』は「史書」として失格の烙印が捺されてしまったのであった。

そのことを示す一例として、『甲陽軍鑑』の史料的价值を否定的に評価している論者ではなく、市川文書の出現以後、その史料的价值を高く評価するようになった論者、上野晴朗の「甲陽軍鑑考」にふれた文章を紹介しよう。

この論説は、当時日本で唯一の官学の牙城である、東京帝国大学の史料編纂所の教授が、史料を吟味した上で  
の研究ということであったので、近代的な学術論文として大いに注目され、この論文はその後、史学界に多大な  
影響をおよぼし、それまで高かった『甲陽軍鑑』の価値を、引き下げるものになったばかりではなく、それ以後  
ずっと現代にいたるまで、史学者たちに強い影響をあたえてきたのである。(46『山本勘助』の一四・一五頁)

このように田中義成の論文は、実は東京帝国大学教授・博士の権威によって、『甲陽軍鑑』の史料的价值に決定的  
なダメージを与えることになったのであった。<sup>(16)</sup>

しかしながら、田中はこの小論を書いたとき何歳であり、どのような研究者としての地位にあったのであろうか。  
田中義成についての『国史大辞典』(吉川弘文館、一九八八年)と『日本史研究者辞典』(吉川弘文館、一九九九年)  
の記述を合成して示そう。

田中義成(一八六〇〜一九一九)は、明治・大正時代、官学を代表した実証主義の歴史学者であり、今日的な言  
い方をすれば、日本中世史を専門としていた。一八六〇(万延元)三月一五日、江戸築地(現、東京都中央区)  
に生まれる。一橋家の家臣田中義信の長男。七歳で父を失い、貧苦のなかで猪野中行に漢学を学んだ。その推薦  
で太政官修史局に写生として出仕、七十六年(明治九)、太政官修史局(七十七年から修史館)二等繕写生。修史館

六等掌記などを経て、八八年、帝国大学臨時編年史編纂掛、帝国大学文科大学書記。九二年、帝国大学文科大学助教授。九五年、帝国大学史料編纂掛史料編纂委員兼助教授。一九〇〇年、同編纂掛部長。〇三年、文学博士の学位を取得。〇五年、東京帝国大学史料編纂掛史料編纂官兼教授。一九年（大正八）、東京帝国大学教授専任。一九一九年（大正八）十一月四日没、六〇歳。『大日本古文書』『大日本史料』六編等を編纂、修史事業の基礎を築いた。

見られるように、田中は官学を代表する実証主義の歴史家であった。大学での講義録は、その没後、弟子たちの手で刊行され、『南北朝時代史』『室町時代史』『織田時代史』『豊臣時代史』となっている。とくに『南北朝時代史』は、今日でも参照され続けている名著である。

しかし、「甲陽軍鑑考」を発表した頃の田中は、太政官修史局二等繕写生、修史館六等掌記などを経て、一八八八年に帝国大学臨時編年史編纂掛・帝国大学文科大学の書記になったばかりであった。前章（研究文献リストの第Ⅰ期）に示したように、武田信玄・武田氏関係の小論を次々に発表しているが、いずれも考証的な論文ばかりである。誤解を恐れずに言えば、「甲陽軍鑑考」はまだ三〇歳の研究者が書いた考証的な小論だったのである。ついでに言えば、田中は、明治二〇年代末以降には武田氏や『甲陽軍鑑』などに関する論文を発表していない。恐らく『大日本古文書』と『大日本史料』の発刊に向けて全力を傾注していたに相違あるまい。

その後の研究史を辿ると、田中の後継者として武田信玄研究をリードしていったのは、弟子の渡辺世祐であり、その成果は名著『武田信玄の修養と経綸』（⑭）に結実した。渡辺は、『甲陽軍鑑』をどのように評価しているのだろうか。甲斐叢書に収録された『甲陽軍鑑』の「解題」（⑬・⑮）で、

さて軍鑑の著者に就ては古来から疑はれて幾多の議論があつたが、明治二十四年に田中義成博士が史学会雑誌

十四号に甲陽軍鑑考を載せてその研究を発表せられた。これによれば、aこれ景憲が信昌に托して綴輯せるものにして、その材料となつたのは信昌の遺記と、信玄の将山県昌景の軽卒山本勘介の子である関山派（妙心寺）の僧の記と、景憲門客の説とであつて、これに景憲の見聞を加へられたものであるといふのである。bそして編纂の目的は甲州流の軍法を武家に傳へんとして信玄に仮托して兵法を説いたものであつて、歴史事実とするには余りに誤謬が多いといふことで、その著大な誤謬も指摘してある、c併しその誤謬のことも今日では尚ほ研究の余地があるものも相応にあるが、d大体に於て田中博士の研究は動かぬ所であつて、著者は景憲であり、その目的も武家が軍法兵法の教科書とせんとしたのであることは確実に動かぬことである。

と書いている。すなわち渡辺は、dのように田中の「甲陽軍鑑考」(②)の結論を確実に動かぬ「定説」としたのである。

このように渡辺が位置づけたごとく、「甲陽軍鑑考」の影響力はきわめて大きかった。明治以来、『甲陽軍鑑』の史料価値を否定的に見る見解は「世間」に広がっていったのである。そこで渡辺は、次のように釘を刺さねばならなかった。

さて軍鑑の記事が歴史事実として誤謬が多いので、史料としての価値は無いやうに世間では信ずる者があるが、それこそ復、大なる誤謬であると信ずるのであるから、その点を少々次に説明して、必ずしも誤謬のみでなく相当に読むべきものであり、研究に資すべきものである理由を簡単に述べて見ようと思ふ。

として、次の二点を強調する。

第一に、著者が信昌に仮托したとしても、『甲陽軍鑑』は、恐らく元和末頃に編纂されたものではあり、それ相応に重要な史料的价值があると言わねばならない。

第二に、『甲陽軍鑑』の記事で最も信すべき主なものとして、次の十一点を挙げる事が出来る。

(1)冒頭の『甲州法度之次第』は、大体において確かなものである。

(2)信玄の信虎追い出しのことは、年代の誤りはあるが、事実と見ることが出来る。

(3)『晴信公卅一才にて発心』の条は、信玄の年齢に誤りはあるが、内容的には確実である。

(4)『春日源五郎奉公』『信玄公御時代諸大将』『小笠原源與齋軍配』『判兵庫星占之事』及び『信玄公御歌の会』等の記事も、多少の疵はあるが、大体において信用することが出来る。

(5)命期巻品第十一から第十四までの群雄に関する詳論は、当時の諸将に対する世評と考えれば大きな誤りはない。

(6)品第十七の『武田法性院信玄御代惣人数之事』は、これで武田家の軍容と勢力の範囲を確かめられる。必ず確かな根拠のあるものであらう。

(7)他の確実な史料で確かめられるので、信玄の詩作に関する逸話なども十分に確実なものとする事が出来る。

(8)品第二十二から第三十八までの戦争のことについては、信玄の功績を過大に説明する傾向があるので、他の記録と照応した上でなければ容易に信用することはできない。とくに年月記入には記憶違いが相当にあるようである。

(9)品第三十八、三十九の、信玄が書いた織田信長の罪状の上書と、信長が信玄の罪状を訴えた訴状は、正親町天皇宸筆の写しがあるので、偽書と考えるべきではない。この上書・訴状などは、『甲陽軍鑑』がよい材料によっていることを窺わせるものであり、その史料的价值が一概に捨てざるべきものではないことを物語っている。

(10)品第四十は信玄の逸事や諸将の逸話を物語っており、戦国武将の心がけを窺うことが出来る。これには多分古い記録があったのであらう。

(11)品第四十一から第四十三までは軍法の巻であって、史料としては余り必要がない。品第四十四から第四十六までは、他の品と較べて見劣りする。しかし、勝頼の時のことは歴史事実と思われるものがかなり多い。

すなわち自身の研究によって渡辺は、『甲陽軍鑑』の史料価値を、師の田中より明らかに高く評価していた。第Ⅱ期・第Ⅲ期においても十分に通用する、柔軟かつバランスのとれた『甲陽軍鑑』の評価である。私見では、右の十一点を指摘しえた渡辺は、『甲陽軍鑑考』の結論を乗り越えることも可能であったのではないかとさえ思われる。しかし結局、渡辺は「甲陽軍鑑考」の結論を「定説」として是認したのであった。<sup>18)</sup>そして、これが戦前の『甲陽軍鑑』論の到達点だったのである。

### 三 定説の固守と批判―第Ⅱ期・第Ⅲ期の動向

では、第Ⅱ期すなわち戦後には、『甲陽軍鑑』の評価はどうなったのであろうか。

結論的に言えば、田中義成の「甲陽軍鑑考」が依然として定説的地位を保った。というより、前述した今井登志喜の『歴史学研究法』が一九五一年に刊行され、以後、現在でも再版され続けていることから分かるように、一部では『甲陽軍鑑』は依然として「偽書」もどきの扱いを受けているのである。

一で述べたように、この第Ⅱ期において、『甲陽軍鑑』の史料論に寄与した代表的な研究者は、高柳光壽・奥野高広・磯貝正義・小林計一郎・有馬成甫らであった。かれらの研究とその主張を最初に紹介しよう。

まず高柳光壽は、周知のように、戦国合戦史の代表的な研究者であり、『戦国戦記』一〇巻の叙述で知られている歴史家である。その叙述において『甲陽軍鑑』に触れている箇所は多くはない。しかし、<sup>19)</sup>の『長篠の戦』において、

『甲陽軍鑑』の史料論にとって決定的な指摘をしているのである（一一〇～一一六頁）。すなわち高柳は、『甲陽軍鑑』では、長篠の戦い前の武田陣営では軍議がなされ、馬場信春らは退却を進言したのに対して、長坂釣閑斎が決戦を進言したことになっているが、

これは「軍鑑」の著者のでたらめである。「神田孝平氏所蔵文書」によれば、このとき長閑は三河に来ていないからである。信春らが退却を主張したのは、事実であったかも知れないが、長坂長閑が決戦を進言したということとは、全くの誤りといってよい。

と断定している<sup>(19)</sup>（一一一頁）。

『甲陽軍鑑』の主要部分は、長坂釣閑斎と跡部大炊助（勝資）に充てられるかたちの叙述となっている。その『軍鑑』が、長篠に來なかつた釣閑斎を、長篠の戦いの軍議の場に登場させ、そこで決戦の主張をしているのであれば、これは『甲陽軍鑑』が、やはり江戸初期になってからの作品であることを示す決定的な証拠となるであろう。

この論点については、酒井憲二の学説を紹介後に検討することにしよう。

奥野高広は、⑮の『武田信玄』で次のように述べる（四三頁）。

……『甲陽軍鑑』は、信玄に仕えた山本勘介の子で、京都妙心寺派の僧が、遺老物語を輯録したものというけれども、その多くは信用できない（田中義成博士『甲陽軍鑑考』）。ただそのうちで『石清寺物語』二巻は、信憑性がある。……

これは、田中の説をかなり粗雑に要約していると言わざるを得ないが、<sup>(20)</sup>ともかく定説に従っていることがわかるであろう。

山本勘介についても、永禄四年九月の川中島の戦いの叙述のなかで、

この合戦で前半の敗戦の責を負い、武田方の軍師山本勘介（勘助）が戦死したとの説がある。勘助については弁護説もあるが、伝説の人物とみるべきである。

と述べている（六九頁）。「伝説の人物」云々という指摘は理解しがたいが、ともかく『甲陽軍鑑』に対する不信は明確である。

また、信玄の遺言による秘喪についても、田中と同じく、

『甲陽軍鑑』に喪を秘したことをのせ、遺体を諏訪湖に沈めたとあるのは誤りである。信玄の墓は当時のままではないが、恵林寺にある。

と指摘しているが、この点に関しては有馬との小論争になったので、後述しよう。

同書の巻末主要参考文献に『甲陽軍鑑』はなく、その史料価値を極めて低く判断していることは明瞭であり、要するに『甲陽軍鑑』に記されていることは、他の信憑性の高い史料で確かめられる限りで用いるという姿勢が貫かれていると言えよう。この奥野の『甲陽軍鑑』への対し方が、第Ⅱ期・第Ⅲ期の研究者たちに共通する基本姿勢であった。

古代史家の磯貝正義は、武田信玄と『甲陽軍鑑』の研究者でもあり、服部治則と②③の『甲陽軍鑑』を刊行した。それまでの『甲陽軍鑑』の活字本が万治版本によっていたのに対し、同書は最古の版本とされていた明暦本を底本として、かつ元禄一二年版行の『甲陽軍伝解』との異同を明らかにしており、また、詳細な注を付してあるものである。この段階での最良の『甲陽軍鑑』の本文であり、第Ⅱ期の大きな達成であった。以後、『軍鑑』といえば、磯貝らの校訂したこの②④『甲陽軍鑑』が利用されて今日に至っている。

その著書③①『武田信玄』（のち③④『定本 武田信玄』と改題して再刊）では、四〇箇所以上で『甲陽軍鑑』の記述に触れているが（同書八四・九四・九六・一〇〇・一〇三・一〇四・一〇七・一〇九・一一一・一二一・一三二・一

四一・二二二・二二六・二三一・二三二・二三七・二三八・二七六・二九八・三〇一・三〇七・三二〇・三三二・三四七・三四八・三五四・三五五頁など）、その大半は『甲陽軍鑑』の誤謬の指摘である。代表的なものを例示しよう。

a とにかく『甲陽軍鑑』は、元服も任官も結婚も、そして初陣まで天文五年のこととして「晴信」の門出を飾ろうとしている。この初陣説は、そうした意図に出た『軍鑑』の創作の疑いが濃厚である。（二二一頁）

b また、晴信が出家して信玄と号した年月についても、『甲陽軍鑑』（品第四、第三十）や系図等は、天文二十年二月十二日、晴信三十一歳の時であるとしているが、これも疑わしい。（二二一頁）

c また、『甲陽軍鑑』は前後の戦況をかなり詳しく述べているが、頼重の降伏を天文十三年とするなど記述に混乱が多い（品第二十四）。同書はまた天文七年、頼重と小笠原長時とが信虎退隠後の甲斐の混乱に乗り、連合して甲斐に打ち入り、七月十九日に韭崎で一日に四度の合戦があったとか（品第十八、なお同書は信虎の駿河退隠を天文七年とする）、同十一年、小笠原・諏訪・村上・木曾ら信濃国の大身衆が談合して晴信退治を評議し、その結果、三月九日、甲・信国境瀬沢合戦、閏三月二十日に平沢合戦、さらに十月二十三日には大門峠の合戦等があり、晴信側が大勝を博したとしているが（品第二十二・品第二十三）、ここにも作為と混乱とがある。おそらく『軍鑑』の作者は、晴信の勇武をたたえとともに、晴信の諏訪経略、ひいては信濃征服を、正当な防衛戦争にでもあったと印象づけるため、晴信の進攻に先立って、信州勢による甲州攻撃があったように作為したものであろう。（二二二頁）

d 戸石城の敗戦は、後世「戸石崩れ」と呼ばれて有名であり、『甲陽軍鑑』は「信玄公の御代に一の無手際なる合戦也」（品第十四）とか……などといっている。しかも『軍鑑』は、この戦いを天文十三年ないし十五年とし、晴信の信州経略の前期の段階に位置づけるなど大きな誤りを犯しており、その内容も軍法を祖述するための仮託



と考えられる。(一五二頁)

e 川中島の合戦が有名になったのは、近世初頭に、武田信玄の軍法を講釈するための軍学書として『甲陽軍鑑』が編述され、それが広く読まれたからである。同書は天文十六年から永禄四年に至る十五年間に前後十二回の合戦があったと述べている。(一五六頁)

f ……川中島合戦に関する著書論文の類は極めて多く、その記述も精緻詳細にわたるものが多い。しかし、この合戦は有名なわりには根本史料が乏しい。……合戦の記述にはどうしても類推による部分や、いぜんとして『甲陽軍鑑』などに頼らざるをえない部分が多い。『軍鑑』は信玄の戦争史に仮託して軍法を説明している部分が多く、とくに合戦の経過は記述が詳細であればあるほど、かえって信憑性が低くなることは、『高白斎記』との比較によって証明済みのことである。だから『高白斎記』にない部分を、『軍鑑』に頼って詳述することは大きな危険を犯すことになる。(一五八頁)

ただし天文二十三年には、相・駿および甲・相間の婚約がそれぞれ履行されている。『軍鑑』(品第三十二)が、三方への輿入れをいずれも弘治二年のことであるとするのは誤りである。(一七六頁)

磯貝も、田中の定説を前提にしていたことが明瞭であろう。第Ⅳ期に入ってからかれが示した56の『甲陽軍鑑』についての見解は、そのことをよく示している。

小林計一郎は、22・26・27・29や「軍役衆と兵糧」(『日本歴史』二〇八号)などで、史料としての『甲陽軍鑑』について独自の検討を行い、『軍鑑』研究に寄与した。まず22では、『甲陽軍鑑』に収録されている「武田法性院信玄公御代惣人数之事」について、生島足島神社(下之郷大明神)に納められた永禄九・一〇年の起請文に署名のある武田の家臣(二三七名)や天正一〇年の武田氏滅亡の年に徳川家康に臣従を誓った武田遺臣の名簿(八九五人)との比較・

検討を行い、同史料が大体において信用できるものであり、永禄一〇年頃の史料であろうことを明らかにしている。

②論文のなかで、小林の『甲陽軍鑑』理解が示されているので紹介しよう。

「甲陽軍鑑」は、江戸時代の初期に、武田流軍学者小幡景憲が、編集したものであると考えられている。「甲陽軍鑑考」によると、景憲は高坂弾正忠の遺記、関山派の僧某の遺記などをもとにして編集したのであるという。その大部分は高坂弾正の著に仮托してあるが、後にも述べるように、高坂弾正という名は、確実な史料には見えぬもので、「甲陽軍鑑」の内容が疑わしいことは、この一事からも推測される。

高坂弾正という名云々の指摘については後で批判を加えるとして、基本的に小林が定説に依拠していることが分かるだろう。その上で、次に進む。

しかし、この書は、おそらく寛永年間ころには出来上っていたと考えられ、明暦二年（一六五六）・万治二年（一六五九）には、それぞれ刊本が出ている。かなり早いころの成立である。その編者小幡景憲は武田家臣の子で武田氏滅亡の時十一歳であった。武田の遺臣の大部分は幕臣になったから、景憲はそれらのもとから、かなりの量の史料を採訪できたと思われる。それで、「甲陽軍鑑」には確実性のある史料の引用してある可能性が多いと見られるのである。

ここで小林は、小幡景憲が徳川家に仕えた武田遺臣から多量の史料を採訪した結果、『軍鑑』には信憑性の高い史料が含まれることになったとの仮説を述べているのであるが、寛永以前の景憲が『甲陽軍鑑』編集のために、そのような史料採訪を行ったのか、そもそも行い得たのかについての検証は全くない。

それはともかく、「武田法性院信玄公御代惣人数之事」には不審な点もあるとして、小幡上総守が五百騎、高坂弾正が四百五十騎であることは、編者小幡景憲の作為と考えられ、信用できないとしている。

要するに小林の仕事はいずれも、定説を前提にして、『甲陽軍鑑』の記事の利用可能性を諸史料に基づいて検討したものであり、この時期における最も着実な『軍鑑』研究と言えるであろう。

以上の論者がいずれも田中の定説を前提としたのに対し、それに率直な批判を加え、『甲陽軍鑑』の史料的价值を積極的に擁護したのが、軍事史家の有馬成甫であった。『日本史研究者辞典』によれば、かれは次のような研究者である。

有馬成甫（ありま せいほ） 一八八四～一九七三。軍事史。海軍少将。一八八四（明治一七）年二月二八日、熊本に生まれ、熊本県立中学済々黌を経て、一九〇五年、海軍兵学校（三三期）を卒業。一九一八年（大正七）、旅順要港部副官。二五年、海軍大佐。二八年（昭和三）、横須賀工廠総務部長。二九年、予備役。三二年、海軍省嘱託となり、造兵史の編纂に従事。四一年、召集を受け、四二年、砲艦福山丸艦長。四三年、福岡地方人事部長。四五年、海軍少将。四五年、召集解除。五七年に、「火砲の起源とその伝流」により國學院大學から文学博士の学位を取得。一九七三年（昭和四八）八月二四日没、八八歳。主要業績『朝鮮役水軍史』（海と空社、一九四二）、『高島秋帆』（人物叢書、吉川弘文館、一九五八）、『火砲の起源とその伝流』（同、一九八二）《年譜・著作目録》秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』（東京大学出版会、一九九二）

有馬は、<sup>②③</sup>「甲陽軍鑑と甲州流兵法」と<sup>②④</sup>「甲陽軍鑑論」の二論文で自説を開陳した。この両論文の内容を、わたしなりに整理すると次のような主張がなされている。

第一に、『甲陽軍鑑』の著者論である。末書下巻之上に、

末書下に九本あり。合二十七本（品）有之也。又右の外あつめのヶ条を書也。高坂弾正在世の時のごとく、聞たることをあつめ書には、春日惣次郎書つき候。初終、甲陽軍鑑惣合末書共に二十三冊の筆者二人は、大蔵彦十郎

と云猿樂也。今一人は春日惣次郎とて、高坂彈正おいなり。

一、右の大藏彦十郎は我家のげいへたにてあれ共、高坂彈正氣に入て彈正所より合力仕り、かい津の奉公人に罷成る子細は、川中嶋四郡の内更級二科二郡は、天文十六年丁未村上破軍の時、治るたかなしみのち両郡りを高坂彈正きりおさむるに、度々のせり合の時、件の猿樂ぬき出たる高名二ツあり、壱ツはがくがんじ家老の塩崎六良左衛門と申剛の武士を討ち、しかも采はいを添て彈正じつけんする。今壱つの頸はぬのしたおとなの小泉治部左衛門、是も剛の武士なるを討て、同じく采はいを添へて持来つて彈正に実験さする。其外くび数十六取つてかたのごとく武変はしりめぐるなれども、膝のくちをわられ、ちんばになれば公界せざらくじんなり。此者殊更物を能書候。其上右の如く、手柄あるよき武士にて心いたり物の善惡を分て分別するに付而、彼彦十郎に聞程の儀を書付よと彈正被<sub>レ</sub>申付<sub>一</sub>候。其人に指添、某惣次郎も見聞く程の事を書付、大藏彦十郎へ渡候へば、彦十郎方彈正老に見せ候。

一、某惣次郎は彈正あねの子也。我ら父は、彈正幼少の時公事を仕、彈正にかちたる者也、然共又拙者を彈正ねんごろに仕り、三百貫の知行をくれて置候。彈正金言の儀は、

一、其方親、我らと公事を仕る子細は、某生れざる以前に拙者父大隈方男子持たず候とて、其方て惣右衛門を養子に仕候。大隈死後に我らに田地少しもわけ分なき故、めやすをあげ公事に仕候得共、数通の書物にて我らまけ候。まけたる故某御屋形信玄公御取立にあづかり、川中嶋四郡りとは申しながら、信濃半国の郡代のまねを今日迄も仕るは、偏になんちが父の惣右衛門方、慈悲を捨て慾ふかく有て、我らの佗言をきかず候に付而、既に指ちがへ可<sub>レ</sub>申と必定存知詰候へ共、各異見に付、此様子公事になる、公事を仕候得者こそ、我らまけ候へ。まけたればこそ、我ら如<sub>レ</sub>此の躰に成也。されば人間は一さいの事大形たゝかふを以て名を取り、立身するぞ。

とあるように、『甲陽軍鑑』の著者は、高坂弾正（と筆記者の猿楽師の大藏彦十郎と弾正の甥春日惣二郎）である。

その著作の目的は、起巻第一に著者自らが述べているように、長篠の戦いで多くの勇将を失ったので、当屋形すなわち勝頼の側近には、信玄時代の作法・法度などを知っている者も少なくなってしまった。そこで、勝頼・信勝の御代において諸侍のなすべき事柄の参考にと、思いつくままに書き記し、初めは長坂釣閑斎・跡部大炊助に充てて、勝頼とその側近に送ろうとしたものであらうと思われるが、天正六年三月以降は、重病に陥った高坂弾正に代わって、父方の甥春日惣二郎が書き継いでいくに至ったのである。そののち、天正一〇年の甲州崩れに際しては、川中島衆は上杉景勝に召し出だされたが、丁度その時越中に行っていた春日惣二郎は、景勝のお抱え衆から外れて牢籠し、佐渡の沢田という在郷で『軍鑑』を書き継いでいく。そして天正一三年に重病となった惣二郎は、死の直前の翌一四年五月に、景勝の家臣となっていた小幡下野守らに、『甲陽軍鑑』の原本を手渡したのであった。

第二に、他方、天正一〇年の甲州崩れの時にはまだ一一歳であった小幡勘兵衛尉景憲（一五七二～一六六三）は、戦国時代の生活経験を持たない。そのかれには『軍鑑』のような体験的記事は書けない。かれは天正一〇年に徳川家康に仕え、一旦は井伊家に付せられたが、二四歳のときに井伊家を出て、関ヶ原の戦いには井伊家の「備を借りて」戦闘に加わり、大坂の陣にも参加した。そして元和偃武から元和七年になるまでの期間に、景憲は、叔父の小幡下野の元にあった『甲陽軍鑑』原本を入手し、その書写を行った。景憲は、著者ではなくて、要するに書写者なのである。『甲陽軍鑑』の各所に「此次写本闕追考可書人」「此次同不審追考可」といった割註があるが、景憲の著作であるとするれば、絶対にこのような割註を入れたりしない。これは、景憲が他人の著作を筆写した明らかな証拠である。

第三に、田中義成は、『甲陽軍鑑』を小幡景憲の著作であるとするが、その判断は、恐らく『小幡景憲伝』と『甲陽軍鑑弁疑』に拠っている。しかし、両書共に著者名が明らかでなく、考証も疎漏でとても信頼できる著作ではない。

それに対して、元和七年に景憲が毛利秀元に進上した『軍鑑』写本の奥書に「高坂弾正記スル所ノ甲陽軍鑑一帙」云々とあり、また、景憲の初期の門人である小早川能久は、『翁物語』巻十一に「甲陽軍鑑と云、高坂記する所の正本也」としている。こちらの方を信用すべきである。

第四に、『軍鑑』偽作説もしくは景憲の仮託説を唱える人は、『甲陽軍鑑』を熟読していないのではないか。

例えば、田中義成博士の②「甲陽軍鑑考」には、『軍鑑』の不正確な点の一つとして、

本書信玄の死する諏訪湖に沈むと記すれども、其墓は甲斐恵林寺（東山梨郡山里村）に在り、同寺現に葬時の偈文を存す。其文に拠れば城中に殯する三年にして喪を発し葬りしと云。

としており、また、奥野高広博士の⑬『武田信玄』にも、

『甲陽軍鑑』に喪を秘したことをのせ、遺体を諏訪湖に沈めたというのは誤りである。

とあるが、『軍鑑』によれば、具足を着せて諏訪の海へ沈めよとの信玄の遺言はあったのだが、宿老たちが相談して、このことばかりは行わなかったとある。すなわち田中・奥野両博士の『甲陽軍鑑』の読みは、はなはだ疎漏である。

第五に、渡辺世祐は、小幡景憲が著者であり、「武家が軍法・兵法の教科書とせん為に著作した」としているが、『甲陽軍鑑』の内容は決して教科書として書かれたものではない。確かに小幡景憲の創始した甲州流兵法は、『甲陽軍鑑』に学んで生まれた兵法ではあるが、景憲の新兵法の内容と本質を印可状などによって知れば、そのような見解はナンセンスであることが明瞭になる。

以上の有馬の主張は、第四期の酒井憲二の見解の先駆けをなすものとも言えようが、論証・論拠の点で不十分であった。すなわち、日本史学の研究者たちは、年代記的な記述の誤りの多さ故に、『甲陽軍鑑』は「史書」としては失格だとしているのに対し、軍事史家の有馬は、『甲陽軍鑑』を熟読し、かつ兵法史的検討をした結果として『甲陽軍鑑』

は信頼できる史料だと主張しているものであり、議論は噛み合っていないと言えよう。(もしも日本史研究者側が有馬の指摘を真摯に受け止めて、『甲陽軍鑑』の文献学的・書誌学的検討を開始すれば、恐らく事態は変わったに相違ないのだが。)

唯一、論争となったのは、有馬の主張の第四点についてであった。史料解釈にかかわる批判だけに、奥野が<sup>25</sup>『甲陽軍鑑』の史料的価値で次のように反論したのである。

最近有馬成甫博士は「甲陽軍鑑論」(『軍事史学』第11号)を発表した。そのなかで田中義成博士が「甲陽軍鑑考」において述べた「信玄の遺骸を諏訪湖に沈めたと書いてある『甲陽軍鑑』は一つも見当たらない」と断定し、「田中博士の『甲陽軍鑑』に対する取り扱い方は甚だ疎漏といわなければならない」とし、なおかなり極言している。そして拙著の『武田信玄』まで同じ態度だと槍玉にあげられた。有馬博士は『甲陽軍鑑』品第三十九の信玄卒去の条には、元和七年の古写本でも、

をのく御遺言のごとく仕候へども、家老衆談合のうへ、諏訪の海へしづめ申事ばかり不仕、三年目四月十二日、長篠合戦一月前に、七仏事の御吊仕り候、

とあるから「田中先生」と私が信玄の遺体を諏訪湖に沈めたと書いた『甲陽軍鑑』は誤りというのは即ち誤りであり、「そのようなことを書いた『軍鑑』は存在しない」とする。磯貝正義・服部治則両氏の校註にかかる『甲陽軍鑑』には「諏訪の海へ(御遺骸を)しづめ申事ばかり、(御吊は)不仕。」云々として、明快である。しかも前文にある「御遺言」を見よう。それは「又それがし弔は無用にて「諏訪の海へ具足をきせて、今より三年目ノ亥ノ四月十二日に沈め候へ」云々とある。

これで田中先生は「帝国大学教授」として『甲陽軍鑑』を読み違え、又読み誤ったのでないことは明白となる

であろう。そして『甲陽軍鑑』のこの条は誤りであることは動かないと思われる。

しかし、この奥野の反論は間違っていた。小林が②⑥「武田信玄の遺骸を諏訪湖に沈めること」で、有馬の史料解釈を正しいとしているが、その通りである。<sup>24</sup>

また、小林は有馬の批判を部分的に受け入れ、

田中義成氏の「甲陽軍鑑考」は、当時においては名論文であったに違いないが、今読んでみると、かなり説明不十分であり、誤もいくつかある。「甲陽軍鑑弁解疑」（宝永三年刊）の説を無批判にとりいれているという点もたしかにあるようである。

とし、「甲陽軍鑑考」が、「軍鑑」の「誤謬ノ最モ大ナルモノ」としてまっさきにあげている「天文七年に信玄が父を逐った」とする記事も、「軍鑑」の説のほうが正しく、信玄が父を追放したことは、現在では疑う者は誰もいないとする。

だが、ここまで来て小林は、結局、

さて、「甲陽軍鑑考」は再検討を要する点もあるが、それは枝葉の部分で、その論の根幹はまず動かぬであろう。

と述べるのである。これは一種の信仰告白に近い文章と言えまいか。すでに二で「甲陽軍鑑考」を批判したわたしから見れば、同論文には、根幹部分の論証は無いに等しいのだから。

そして小林は、有馬に三点の批判を加える。

第一点は、『甲陽軍鑑』の筆者は「高坂弾正」であると言いが、そう信ずるというのみで、その論拠は示されていない、とする。



しかし、有馬は、末書下巻之上の記述をはじめとして、多くの論拠を示している。むしろ小林のほうが、「甲陽軍鑑考」の説は果たして確実な論証を成し得ているのかを検証すべきであったのだ。

第二点は、②の「高坂弾正考」でも触れられている論点であるが、武田氏関係の確かな文書には「高坂弾正」という名は一回も見えない。大部分は「春日弾正忠」であり、「香坂弾正左衛門」と「香坂弾正忠」が僅かに見えるばかりである。そのことから、「高坂弾正」と書いている『甲陽軍鑑』の著者は、春日弾正では有り得ないとするのである。

しかし、これはなんとも奇妙な論法でしかない。それが成り立つのは、「春日弾正」や「香坂弾正」などの名前が『甲陽軍鑑』に登場しない場合である。すなわち『甲陽軍鑑』の著者が、それらの名前を知らずに「高坂弾正」と書いてしまったと言いつけるからである。ところが、『甲陽軍鑑大成 索引篇』を見れば明らかのように、『甲陽軍鑑』には、「高坂弾正」以外に、「香坂弾正」や「春日弾正」などが何度も登場する<sup>(23)</sup>。ということは、『軍鑑』の著者は、「香坂弾正」や「春日弾正」を知らなかったわけではなく、それらの名前を各所に記しながら、奥書などに「高坂弾正」と書き分けたのである。つまり、著者は意識的に「高坂弾正」と書いたことを示しているのであって、これをもって『甲陽軍鑑』を疑うことは出来ない。

そして第三点は、信玄の葬儀が何時行われたかについてである。すなわち、小林は次のように論ずる。

「甲陽軍鑑」は信玄の葬儀を長篠役の一カ月前とし、品第五十一の天正三年四月十二日の条にその記事がある。しかるに、信玄の葬儀は天正四年四月十六日に行われたことが明白であり、しかも、この葬儀で高坂弾正、すなわち春日弾正忠は重要な役を演じている。彼は、跡部大炊助・同美作守と共に、信玄の遺骸が仮に納められていた塗籠を開き、遺骸を棺に移した。また彼は「別して往年の因残らず」と嘆願して、武将としてはただ一人、剃

髪・染衣の出家姿で葬列に加わったのである（御宿監物長状）。この書状については、疑もあるが、葬儀の箇所は確実な記録をもとにして書いているらしく、きわめて正確である。（中略）高坂弾正がその生涯で最も感銘深かったに違いないこの盛儀の年を間違えることは考えられず、ことに長篠の役との先後を間違えるなどということとは絶対ありえない。（中略）「甲陽軍鑑」の重要な部分が高坂弾正の筆でないことはこの一事でも明白であり、第一高坂弾正の遺記などという物があつたかどうか、甚だ疑わしい。このような大きな間違いが平気でまかり通っているところを見ると、「甲陽軍鑑」が執筆されたころ、天正初年の時代を体験した人が筆者の側にいなかったとみるべきであろう。

小林は、この部分では、田中義成よりも『甲陽軍鑑』の史料的价值に否定的であり、高坂弾正の遺記の存在さえ疑っている。確かに高坂弾正が『軍鑑』の著者ならば、武田信玄の葬儀を一年間違えるはずはあるまい。事実、『大日本史料』第十編之十五（東京大学史料編纂所編、一九七五年）の武田信玄死没の条（八九〜四〇三頁）でも、天正四年四月十六日に武田信玄の葬儀が行われたことを示している。

が、これまたかしである。『甲陽軍鑑』の天正三年四月十二日の記事は、はたして間違っているのだろうか。結論を言えば、否である。

信玄の「三年の間喪を秘せ」という遺言の「三年」とは、天正元年から同三年四月十二日までであるから、信玄の遺言が実行されれば、天正三年四月十二日に何らかの仏事が営まれたはずである。とすれば、『甲陽軍鑑』以外にもそれを示す史料が残されているに相違ない。

そこで、『大日本史料』第十編之十五の武田信玄死没の条に採られている諸史料を見ると、『天正玄公佛事法語』（一二七〜一四〇頁）に、「今茲天正三年乙亥孟夏十二日、伏値恵林寺機山玄公大居士三周忌之辰、預今月今日、就府

殿、資嚴法蓮、虔備香華燈燭茶菓珍倉饍、以伸供養、……」とあるように、天正三年乙亥孟夏十二日すなわち天正三年四月十二日に三周忌の法要が営まれていたのである。『大日本史料』は標出をつけていないが、信玄の遺言通りに、天正三年四月十二日には、三周忌の法要が執り行われていたのであった。なお、この点についてはすでに上野晴朗が、③⑥『定本 武田勝頼』で、

……恵林寺の玄公佛事法語および北高禪師の記録などから見ると、事実、天正三年（一五七五）四月十二日、長篠の役に出発前、恵林寺および甲府屋形において三回忌の七仏事の大法要は営まれたことが見えている。これは正式な安骨葬儀というのではなかったが、三年の喪明けが信玄の威烈をあらためて家臣団の胸に蘇らせた点では、本葬の比ではなかった。

とし（一八八頁）、さらに高野山成慶院の「武田御日坏帳」によって、勝頼は山県三郎兵衛を使者として高野山に登らせ、天正三年乙亥三月六日建立の三回忌の塔婆を立てていたことなどを指摘している（一八八―一九一頁）。

以上のように、小林の有馬に対する（そして『甲陽軍鑑』の史料的价值に対する）批判は、いずれも成り立たないことになる。

こうして第Ⅱ期には、軍事史家有馬成甫の率直な定説批判が現れたが、小さな論争にとどまり、発展的なものとはならなかった。当時の日本史学界は、軍事史研究に極めて冷淡であり、有馬論文は『甲陽軍鑑』の定説的理解を変えるには至らなかった。別な言い方をすれば、有馬論文は、文献学的・書誌学的そして史料学的な論証作業を経ていなかったために、その主張は十分な説得力をもたず、日本史学（とくに戦国史）の研究者たちは、依然として田中の②「甲陽軍鑑考」の定説に安住したのであった。

有馬や石岡久夫らの兵法史研究者はわが道を歩み、『日本兵法全集』全七巻（新人物往来社、一九六七年）を編み、

③の『日本兵法史』をまとめて、その後の兵法史研究の土台を作り出していったのであるが、日本史学との対話は途絶えたまま今日に至っていると言えよう。<sup>23</sup>

かくして第Ⅲ期に入る。

第Ⅱ期の状況を打破するひとつの契機となったのは、「山本勘助」の存在を示す市川文書の出現であった。上野晴朗の④⑥『山本勘助』（新人物往来社、一九八五年）によれば、それは一九六九年一〇月のことであった。その間の詳しい事情については同書に譲るが、北海道釧路市松浦町の郵便局長市川良一氏所蔵の（弘治三年）六月二十三日付武田晴信書状である。上野は、弘治三年の文書としている。『山梨県史』資料編<sup>5</sup> 中世<sup>2</sup>上 県外文書、一頁、『戦国遺文 武田氏編』第一巻、五六二号）によって全文を示すと、次のような内容である。

注進状披見、仍景虎至于野澤之湯進陣、其地へ可取懸模様、又雖入武略候、無同意、剩備堅固故、長尾無功而飯山へ引退候哉、誠心地能候、何ニ今度其方擬頼母敷迄候、就中野澤在陣候砌、中野筋後詰之義、預飛脚候き、則倉賀野へ越上原与三左衛門尉、又当手之事も、塩田在城之足輕為始、原与三左衛門尉五百余人、真田江指遣候処、既退散之上、不及是非候、全不可有無首尾候、向後者兼存其旨、塩田之在城衆ニ申付候間、從湯本注進次第二、当地へ不及申届、可出陣之趣、今日飯富兵部少輔所へ成下知候条、可有御心易候、猶可有山本菅助口上候、恐々謹言、

六月廿三日

晴信（花押）

市河藤若殿

小林は②論文で、この文書を詳細に検討し、それが弘治三年（一五五七）のものであり、使番を勤める「山本菅助」（山本勘助・勘介）は「信玄の側近にいて、ある程度の地位をもち、信玄の信任も得ていたと考えてよい」と結論し

ている。

この山本勘助の実在は、大きな波紋を呼んだ。例えば磯貝は、③④の著書『定本 武田信玄』で、次のように指摘している（二〇三頁）。

この戦いに、前半戦の敗戦の責めを負って、山本勘介（勘助とも書く）が戦死したといわれている。勘介は『甲陽軍鑑』等によって、古来有名な人物であるが、従来信玄時代の確実な史料に出てこなかったため、架空の人物であろうとか、実在しても『武功雑記』にいうような山県昌景の部卒程度の人物であろうとされてきた。ところが、近時、北海道釧路市在住の市川良一氏宅から六月二十三日付の市河藤若宛晴信の書状が発見され、その実在が証明された。……とにかく、『軍鑑』およびその系統を引く諸書が、勘介をあまりにも称揚しすぎたため、その実像が失われ、かえって実在そのものまで疑われる結果になっていたが、「市川文書」によって正しい位置づけが試みられるようになったのは喜ばしい。

山本勘助が架空の人物にとされたのは、まるで『甲陽軍鑑』のせいであるかのような書き方であるが、もしも『軍鑑』の記述がなければ、勘助が存在することさえ意識されなかったことであろう。勘助を架空ないし虚構の人物としてとしたのは、後の論者・研究者たちであって、『軍鑑』ではない。甲斐武田氏や戦国史の研究者たちは、『甲陽軍鑑』が山本勘助のことを記述してくれたことに、むしろ大いに感謝すべきなのである。

この磯貝の書き方からも想像がつくように、山本勘助の実在を示す文書の発見も、『甲陽軍鑑』の史料性格を抜本的に見直そうという、史料論の機運を生み出すには至らなかったものであった。

唯一人、上野晴朗が、第Ⅲ期の③⑥『定本武田勝頼』から『甲陽軍鑑』を積極的に活用するようになり、第Ⅳ期には④⑥『山本勘助』（新人物往来社、一九八五年）を書いて、その子孫の存在などを明らかにしたが、「作家」としての立

場をあわせ持ったかれの試みは孤立していたのではないかと思われる。

こうして戦国史研究者の世界では、『甲陽軍鑑』の史料論を深めようとする本格的な動向は生まれなかったのである。

そこで、第Ⅱ期～第Ⅳ期の日本史研究者の『甲陽軍鑑』理解を代表する文章として、磯貝正義の⑤⑥「甲陽軍鑑」(一九九三年)があるので、それを紹介しよう。この『甲陽軍鑑』理解が今日の定説と言えるのではないか。

第一に、高坂の実録というのは仮託であるとするのがほぼ今日の定説である。本書の内容に誤謬の多いことは、近世すでに『甲陽軍鑑弁疑』『甲斐国志』等が指摘しているが、近代に入り徹底的批判を加えたのが、田中義成博士の「甲陽軍鑑考」(『史学会雑誌』一四号、一八九一年)である。高坂の実録とするのには余りにも誤りが多く、特に合戦の年月などは『妙法寺記(勝山記)』『高白斎記』その他確実な史料と対照すれば、大半が誤りであることが判明する。合戦だけでなく、武田信虎の駿河退隠事件(天文十年)を天文七年に誤り、信玄の葬儀(天正四年四月十六日)を天正三年四月十二日に誤るなど、高坂の実録とは到底考えられない誤りが多い。

第二に、本書の著者とソースについては諸説あるが、甲州流軍学の祖小幡景憲の編纂になり、高坂の遺記(武将やお伽衆からの聞書や覚書など)、関山僧の記、門客の説などを中心に、自分の見聞などをまじえて集大成したものである田中博士の説がやはり最も有力であると思う。元和七年(一六二一)の奥書の写本が存在するから、元和頃には成立していた。

第三に、量的には合戦の記事が多く、本書が軍記物に分類されたりするが、『甲陽軍鑑』は、その書名が示すとおり、甲州流軍学の手本の書Ⅱ教科書であり、軍学の教典である。撰述の目的も内容の構成も一般の軍記物とは異なる。第四に、本書を分析すると、個人の単純な著述ではなく、多数の資料から構成された編纂物らしいことがよく分か

る。例えば、甲州法度之次第（品第一）・信繁家訓（同二）・命期の巻（同十一・十四、東国武将の論評）・武田法性院信玄公御代惣人数之事（同十七）・石水寺物語（同四十、信玄や家臣の逸話）・軍法の巻（同四十・四十三）等、年代記以外の資料が広範囲に使われている。

第五に、しかし、『甲陽軍鑑』は史学に益なし」では決してない。「甲州法度之次第」や「信繁家訓」は確実なものであり、「武田法性院信玄公御代惣人数之事」は希有の史料である。十七首の詩篇も信玄の自作である。また、全編戦国武士の思考や行動を知る手がかりとなる重要な文献である。

第六に、江戸時代に「本邦第一の兵書」ともてはやされ、写本のほかに二十種近い板本が出ている。年紀のあるものでは明暦二年板本が最も古く、明治以降の刊本は万治二年板本を底本とするものが多い。

右の磯貝の見解のうち第一・第三を見れば、田中の「甲陽軍鑑考」(②)が現在の定説の中心にあることは明瞭であろう。そして、第Ⅰ期・第Ⅳ期における研究の進展による認識が、第四・第六に盛られているのである。

二で述べたように、田中の「甲陽軍鑑考」(②)は決して確実な論証がなされた論文ではなく、むしろ粗雑な考証にとどまった小論文にすぎない。にもかかわらず、右に示したようにそれは依然として定説の中核に位置しているのは何故か。

その答えは、幾つも想定し得るが、その主要なものは次の諸点であるとわたしは考える。

第一点は、「東京帝国大学」田中義成「教授」・「博士」の権威であり、そのご威光であろう。「甲陽軍鑑考」(②)には、そうした権威の後光が輝いていたのである。今ではナンセンスであるが、戦前ではそうではなかった。戦後も恐らく一九六〇年代までは、その余光が学問世界には厳然としてあった。そして今も、アカデミズムの内外において、同様の権威主義が再生産され続けていることを誰が否定し得ようか。

但し、それだけでは、かくも長期間にわたって定説たり続けることは出来まい。

第二点は、甲斐武田史氏研究や戦国大名武田信虎・信玄・勝頼研究、そして戦国史研究が、史実とそれが起こった日時を確定していく作業をベースにした政治史中心の研究であったことによるであろう。それらのオーソドックスな研究にとって、合戦や出来事などの史実とその起こった年月日を確認するのにふさわしい史料すなわち古文書や古記録、そして『勝山記』などの年代記的史料と較べて、『甲陽軍鑑』はあまりにも誤謬の多いテキスト・史料にしか見えなかった。だから、「史書」としては駄目だということになった。

しかし、『軍鑑』の著者が断っているように、それは「史書」として書かれたものではない。そうでないものに烙印を捺すのはナンセンスでしかない。

にもかかわらず、多くの研究者たちは、『甲陽軍鑑』に記載されている事柄については、他の信頼できる史料つまり古文書・古記録・年代記などと比較して、その真实性・信憑性を確かめ、その限りでの記述を利用する態度をとってきた。というよりむしろ、『甲陽軍鑑』の記述をチェックして誤りを見つけると、それを「誤りである」「大きな間違い」「でたらめである」「創作である」「虚構である」「作為したものであろう」「仮託と考えられる」「疑わしい」「信用できない」等々と強調し続けて、今日に至っている。まるで、『甲陽軍鑑』の誤りの指摘が、自らの論文の考証の厳密性を示す役割を果たしているかのようである。

かくして『甲陽軍鑑』の記述に「誤謬」を見つけたたびに、定説への「安住」が確認され続けてきたのであろう。（しかし、より困難なのは、例えば小林が試みたように、『軍鑑』の中にある確実な部分を発掘していく仕事であることは言うまでもあるまい。）

このような利用の仕方から脱却し、『甲陽軍鑑』というテキストの性格、あるいは史料の性質を深める方向へと研



究が深化することはなかった。戦国史研究者たちのなかには、本格的な『甲陽軍鑑』論を志す者は誰も現れず、テキストとしての、そして史料としての『甲陽軍鑑』の本格的探究を目指す研究は、結局、生まれてこなかったことに注意しなければならない。これでは何時まで経っても『甲陽軍鑑』は浮かばれない。

それだけではない。

第三点は、『甲陽軍鑑』のように複雑かつ豊穣なテキスト＝史料には、それに迫るための文献学的・書誌的な手続きと作業が不可欠であるが、そのような方法を駆使しようとした戦国史研究者はいなかったのではないか。さらに言えば、『甲陽軍鑑』のテキスト論や史料論を開始しようとする試みもまた現れなかったかに見える。

そして第四点として、これが最も大切なことだと思われるのだが、戦国史研究の新たな課題認識・研究視角・研究方法の模索が、新たな史料論的開拓を生み出すかたちでは登場してこなかったのではあるまいか。<sup>(24)</sup>

わたし自身は、『甲陽軍鑑』と格闘することを通して、〈十六世紀史〉研究の諸課題を発見していくつもりである。

『甲陽軍鑑』からは、『大坂夏の陣図屏風』の読解だけでなく、軍事史・戦争史、社会史や地域史、政治思想史と政治文化史などの諸領野にさまざまな研究課題を見出していくことが可能だろうと考えているところである。

#### 四 国語学者酒井憲二の業績とその位置付け

こうした日本史学における『甲陽軍鑑』理解の「停滞状態」を根本的に打開する仕事は、国語学者の酒井憲二によって遂行された。すなわち第Ⅳ期の始まりである。

酒井は、山梨県立女子短期大学に奉職したのを契機に、『甲陽軍鑑』研究をライフワークとした国語学者である。<sup>(25)</sup>

かれは、第Ⅲ期に、③⑤論文の『甲陽軍鑑』の版本研究からスタートし、③⑧によって明暦本よりも古い版本の影印を刊行した。そしてそれに止まらず、第Ⅳ期に入ってから、『甲陽軍鑑』の写本研究へと向かい、同時にその国語学的研究を積み重ねていった。すなわち、③⑨～⑥①、⑥③・⑥④、⑥⑥～⑦⑦、⑦②・⑦⑤・⑧①という圧倒的な仕事によって、『甲陽軍鑑』の書誌学的・文献学的・国語学的研究を推進していった。そして、第Ⅰ期～第Ⅲ期の日本史家たちの研究の停滞的状况とはまったく別に、基礎的かつ極めて重要な文献学・書誌学そして国語学的研究を蓄積し、ついに『甲陽軍鑑大成』全七巻を完成したのである。

したがってわたしは、『甲陽軍鑑』の研究史は、『甲陽軍鑑大成』以前と以後とに分けられるべきであると考え。そのように言えるのは、『甲陽軍鑑』の信頼できる本文テキストが、ここに初めて提供されたからである。それを一読して、わたしは強い衝撃を受けた。われわれは、この『甲陽軍鑑大成』によって初めて、『甲陽軍鑑』とは一体どのような構成のテキストであるかを知り、その本文を本格的に読めるようになったと言っても決して過言ではあるまい。

また、『甲陽軍鑑大成 研究篇』に収録された酒井氏の諸論文のどれもが、実に有り難い基礎的研究であり、その成果を真摯に受け止めることによって今後の『甲陽軍鑑』研究は大きく前進できるであろうからである。

では、酒井の研究の主要な結論をどのようなものか。

『甲陽軍鑑大成 第一巻 本文篇上』の「解題」と『甲陽軍鑑大成 第四巻 研究篇』、そして『甲陽軍鑑』作者の謎―小幡景憲と高坂弾正―によってまとめると、次の諸点にまとめられるであろう。

第一に、酒井の文献学的・書誌学的研究によって初めて版本の系統と写本の系統のそれぞれについて整理がつき、しかもテキストの底本とすべき写本も確定された。

第二に、『甲陽軍鑑大成 本文篇上・下』は、『甲陽軍鑑』現段階での最も信頼できる本文であり、『甲陽軍鑑』は本来、全二十三冊であり、次のように構成されたテキストである。

1	卷一	「口書・目録」 一之二三四
2	卷二	五之六七八九十
3	卷三	十一 四君子犛牛卷一
4	卷四	十二 四君子犛牛卷二
5	卷五	十三 四君子犛牛卷三
6	卷六	十四 四君子犛牛卷四
7	卷七	十五之六（後半部分は散逸）
8	卷八	軍法上卷 十七
9	卷九	合戦之卷一
10	卷十	合戦之卷二 上
	卷十一	合戦之卷二 下
11	卷十二	合戦之卷三
12	卷十三	合戦之卷四
13	卷十四	四十石水寺物語 上
14	卷十五	石水寺物語 下
15	卷十六	軍法之卷 下

16	卷十七	四十七之内	公事之卷六品上
17	卷十八	四十八之内	公事之卷六品下
18	卷十九	勝頼記	上
19	卷二十	勝頼記	下
20	末書上卷	第一〜第十九	
21	末書下卷上	一本目〜九本目	
22	末書下卷中	十本目〜十八本目	
23	末書下卷下	十九本目〜二十七本目	

すなわち、従来の版本の『甲陽軍鑑』とは大きく異なり、末書四冊が含まれていたというのである。<sup>(26)</sup>

なお、卷三〜卷六は、釣閑斎・跡部大炊助の両出頭人への呈上書を中心部分であり、口述筆記の気味の最も強い箇所である。卷八は、「軍法上巻」とあるが、武田軍の総人数揃えの記録である。卷九〜卷十三の「合戦之巻」は、信玄死去の直後あたりから書き始められていた部分である。卷十四・卷十五は、信玄サロンの談話の集成である。卷十六は「軍法之巻下」であるが、この巻こそ本来の軍法の巻であろう。但し、後人の手の加わった可能性も否定できない箇所である。卷十七・卷十八は「公事之巻」としてまとまっており、比較的早く成ったものと思われる。卷十九・卷二十は「勝頼記」であり、最も遅くまで書き続けられたところであるが、春日惣次郎によって書き続けられた部分には最早呈上書の性格は見られない。末書上巻は、箇条書き的な条章が多く、下巻には軍法に関する条章が多く集められている。このような原本甲陽軍鑑の構成は、雑纂的であるが、そこに戦国の編集の限界を読み取ることも可能ではないかとする。

第三に、『甲陽軍鑑』の原本は、主として高坂弾正の口述・口語りを大蔵彦十郎が筆記することによって成立したと考えられる。そして弾正死後は、甥の春日惣次郎によって書き継がれたものであった。しかし、天正一〇年の甲州崩れ以降、春日惣次郎は浪々の苦境にあり、原本は傷みに傷んでいった。それを、恐らく小幡下野守から受け継いだ小幡景憲は、その傷んだ原本の書写に努め、元和七年頃に『甲陽軍鑑』の写本を作り上げた（この写本は現存しない）。景憲の書写態度は、傷んで写し難い箇所には「切れて見えず」という注記を一九〇数箇所もしているように原本に忠実であり、加筆や潤色などがあったとしても、それは最小限度に止められたであろうと判断できる。

第四に、『甲陽軍鑑大成』に翻刻された本文は、息の長い一センテンス文、重言表現、新興語、老人語（古語）、俗語、訛りなど室町末期の口語りの要素を色濃く残している。このような文章を、小幡景憲の世代が書くことは出来ない。景憲の役割は、謹直な写し手つまり写本の作成者であって、田中の言うような「綴輯者」や著者では有り得ない。

第五に、幾多の合戦に信玄と生死を共にした高坂弾正ならば、犯すはずもない誤謬が少なくないといわれているが、「存じ出だし次第書するにつき、年号、よろづ不同にして、前後みだりに候とも」（巻一、目録末）とか、「人の雑談にて書き記し候へば、定めて相違なる事ばかり多きは必定ばれ共」（巻五）などと自ら断っているとおりであって、史料として限界のあることは当然である。誤謬が『甲陽軍鑑』の価値をさげることはない。

第六に、『甲陽軍鑑』は、「勝頼公御代のたくらべになさるべき」ことを願って、信玄遺臣の立場から、新君勝頼公とその側近への諫言書として書かれたものを根幹としている。

以上のような酒井の研究成果・仮説に対し、では戦国史研究者たちは、どのように対応したのであるうか。きちんと応答したのであるうか。

## 五 酒井仮説をめぐる検討・検証

管見の範囲内であるが、酒井憲二の研究成果に最も真摯に対応しようとした論者は太向義明だけであろう。何故なら、かれの主要な研究関心・課題が、軍記物などにおける歴史叙述がどのように変容し、それが歴史学研究とその成果としての歴史叙述にいかなる影響をあたえてきたのかを解明していくことだからである。

太向の『甲陽軍鑑』理解は、⑥の「編著史料と戦史の取り扱いを考える―長篠の合戦を材料にしたひとつの試み―」と⑦の『長篠合戦―虚像と実像のドキュメント』に明瞭なので、それを紹介しよう。

太向は、藤本正行の仕事に影響を受け、長篠の合戦のイメージⅡ叙述が編著史料・戦史そして近代・現代の歴史叙述に至るまでどのように変容してきたかを検討する綿密な作業を行っている。⑥は、まず近世の著述物・編纂物十四点を選び、そこに描かれた長篠の合戦の変容を整理・把握する。次に近代・現代の長篠の合戦についての代表的著述を十編選んで、それらが近世の著述物・編纂物の記述をどのように扱ってきたのかを、「武田方の軍議」と「織田勢の鉄炮の数とその射撃法」に絞って検証するという根気強い作業を行った。その検討結果を踏まえて、⑦の著書を発表したのである。

では、太向の『甲陽軍鑑』論はどのようなものか。⑦によって示そう。

信玄・勝頼二代に仕えた武田家の宿老、高坂弾正忠虎綱の遺記を、甥の春日惣次郎らが書き継ぎ、近世の甲州流軍学の創始者小幡勘兵衛景憲が編纂したという設定で広く流布した『甲陽軍鑑』は、全二十巻・五十九品から構成されている。同書の主題である信玄時代賛美・勝頼体制批判の最大のポイントになっている長篠の合戦の記事は、巻六・品第十四と、巻十九・品第五十二の二か所にあり、武田軍の軍議の模様も、その双方に記載されて

いる。

この「武田軍の軍議」の模様を『甲陽軍鑑』の巻六・品第十四の記述によって要約すると、まず、馬場美濃守・山県三郎兵衛・内藤修理亮の三名が、三か条の諫言を言上し、大敵を前にしたら退くものである、ひとまず甲斐へ帰陣し、信長と家康が追撃してきたら、信濃国内で合戦すれば、勝利は間違いないと主張した。それに対して長坂釣閑斎が、武田軍は敵を見て退却したことはないと反論したので、勝頼も釣閑斎の主張に賛成して退かなかった。次に馬場が、では長篠城を力攻めにしようと主張するが、長坂が反論し、勝頼は今度も釣閑斎に賛同した。そこで馬場が、ならば長篠城を攻め落とし、勝頼を城におき、親族衆全員を後備えに布陣させ、総勢は旗本の先備えとし、山県・内藤・馬場の三将が川を越え、時折戦闘しながら長陣に持ち込めば、信長軍は長陣ができず、退却するに違いないと、三たび主張した。すると今度も長坂が反論し、またしても釣閑斎の意見に賛成した勝頼は、明日の合戦を引き延ばすまいと楯無・御旗に誓文を捧げた、というのである。

太向は、しかしと問題の核心を指摘する。すなわち、

この記事が『当代記』と同様、長篠には居るはずのない長坂釣閑斎を登場させ、しかも、大敗を招いた元凶たる交戦主張者を演じさせるという、虚構を柱にしているからである。

『甲陽軍鑑』は、長篠の合戦の時北信濃の海津城に在番していたために、信玄子飼いの宿老の中で一人だけ生き残ることになってしまった高坂弾正忠が、長坂釣閑斎・跡部大炊助を重用する勝頼の体制を批判するために綴った手記がベースになっている（もしくは、高坂に仮託して、他者がそのように設定した内容になっている）。そして、長篠で行われたという軍議の模様も、……実際にも行われたであろう軍議とは関係なく記されたものと推察される。長篠には来ていないはずの長坂が悪役として弁舌を奮っているのは、何よりも証左であるし、……こ

これらの応酬がこの記事の筆者の創作であることは、おそらく間違いあるまい。

と主張する（九八・九九頁）。そしてさらに、

『甲陽軍鑑』を国語学の面から研究されている酒井憲二氏によると、同書の記事に表れている言葉遣いは、大久保忠教の『三河物語』以上に、室町時代末期の色合いを残し持っているという。その意味で、軍議の記事を記したのを高坂弾正忠本人であると考えらるならば、彼は大敗を招いた勝頼の体制を批判するために、架空の軍議をでっち上げたと解釈しなければならない。もし、軍議の中に、多少なりとも実像の部分が含まれているとしても、後世の我々がそれを識別することは到底不可能であり、結局、品第十四に詳述されている武田軍の軍議は、その全般を虚像であると結論づけるしかないのである（九九・一〇〇頁）。

と述べて、

重要なことは、『甲陽軍鑑』品第十四、同書品第五十二、『当代記』のいずれもが、居るはずのない長坂を主役の一人として祭り上げ、大敗を招いた元凶を演じさせているという「虚構」であり、これら三書によって伝えられている武田軍の軍議は、すべて虚像である（一〇〇・一〇一頁）、

と結論しているのである。

この武田軍の軍議を「虚構」「虚像」とする見解は、三で紹介した高柳光壽の見解に依拠したものであり、その後の奥野高広や二木謙一などの研究者たちも、その高柳説を承認していることは、太向の指摘している通りである。

では、太向（というより高柳ら）の見解は正しいのであろうか。わたしは、その判断に疑問を抱いた。何故か。

『甲陽軍鑑』の著者たちにとって長篠の合戦は、著述の契機となった出来事の一つであり、決定的な合戦であった。しかも、この『甲陽軍鑑』は、勝頼の出頭人として、武田氏を滅亡させることになった張本人の長坂釣閑斎と跡部大



炊助に与えられるべきものとされた著述であった。軍議を詳細に記す巻六・品第十四は、その核心部分の一つであり、その奥書に、

天正三年乙亥六月吉日

長坂長閑老

高坂弾正記之

跡部大炊助〔参る〕

とある巻なのである（『甲陽軍鑑大成 本文編上』一六四頁）。もしも、これが長坂釣閑斎と跡部大炊助の手に渡ったならば、そんな馬鹿なと反撃され、高坂弾正の批判はあっさり一蹴されてしまうであろう。果たしてそのようなナセンスな「虚構」を持ち込むであろうか。

もしも、この部分が「虚構」であることが間違いないければ、有馬や酒井の仮説は、それこそ致命的なダメージを受けることになる。高柳の見解が確実であれば、酒井の仮説を受け入れているわたしは、その立場を捨てなければならぬまい。

それでは、高柳・奥野・二木そして太向らの仮説を支えているのは、どんな史料の如何なる解釈なのであろうか。決定的な史料とは、次の文書である（（天正三年）五月二十日付武田勝頼書状、『山梨県史』資料編5 中世2上 県外文書、一〇三三号、『戦国遺文 武田氏編』第四卷、二四八八号）。

当陣之様子無心許之旨、態飛脚祝着候、万万属本意候之間、可為安堵候、然者長篠之地、取詰候之處、信長・家康為後詰雖出張候、無指儀及対陣候、敵失行之術、一段逼迫之躰候之条、無二彼陣へ乗懸、信長・家康両敵共、此度可達本意儀、案之内候、猶、其城用心別而可被入于念事、可為肝要候、恐々謹言、

五月廿日

勝頼（花押）

## 長閑齋

長坂釣閑齋の陣中見舞に対する勝頼の返事であり、「長篠之地取詰候処」云々とあるので天正三年のものである。一読した程度では、内容に問題はなさそうに見える。この通りならば、釣閑齋は長篠以外の地の城に在城しており、「武田軍の軍議」にはいられないことになる。酒井の仮説は、これで崩れるのだろうか。

しかし、何度も読み直しているうちに違和感が次第に膨れあがってきた。その第一は、高柳らは、肝心の史料批判を殆ど行っていない。第二に、「長閑齋」とあるのが何とも疑問であった。そして第三に、『戦国遺文 武田氏編』で同文書を見ると、その次に、ほぼ同文・同内容の三浦右馬助充の（天正三年）五月二十日付武田勝頼書状がある。これはどうしたことであろうか。

「長閑齋」から検討を開始しよう。

最近の『武田信玄大事典』（新人物往来社、二〇〇〇年）・『戦国武将・合戦事典』（吉川弘文館、二〇〇五年）や『戦国人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇六年）によれば、長坂虎房は、元亀元年（一五七〇）九月頃に出家し、釣閑齋光堅と号しており、その頃より信玄の側近の有力宿老として活躍をみせはじめ、勝頼期に入ると、勝頼の側近として重用され、内政・外交に実績が多数所見される。そして、天正十年（一五八二）三月、織田軍により甲府一条氏館で息子筑後守とともに殺された。

このように勝頼側近として重用されていた釣閑齋が、「其城用心別而可被入于念事、可為肝要候」とあるのは不審である。釣閑齋は、側近としての立場を離れて一体どここの城を守っていたと言うのか。高柳らはこの城を検討していない。私見によれば、釣閑齋は長篠に来ていたとするのが、かれの勝頼側近としての立場・役割を考えると最も自然であり、それを唐突に否定するこの文書の内容には、直ぐに合点するわけにはいかない。

そもそも、どうして宛所に「長閑斎」とあるのだろうか。

長坂虎房の出家名は「釣閑斎」であって、「長閑斎」ではない。そこで、元龜元年以降の文書の差出（奉者）・充所・本文・印などに「釣閑斎」・「長閑斎」が登場する文書を集めてみると、八一点ほどになった。

それを表にしてみると、<sup>27)</sup>「釣閑斎」とある文書が殆どであって、「長閑斎」と書かれているのはたったの三点に過ぎないのである。しかも、そのうち二点は写しなので、除外して考えるべきである。（一点は『判物証文写』所収の写しで、しかも充所になぜ「長閑斎」と書かれているのか、それ自体が不審の文書である。もう一点は穴山信君書状であるが、『諸州古文書』所収の写しである。）

とすると、長坂釣閑斎光堅のことを「長閑斎」と書いている文書は、この（天正三年）五月二十日付武田勝頼書状だけとなる。すなわち、たった一点しかない。

この勝頼書状を書いた右筆は、普段から長坂と付き合いがあったはずであり、勝頼の有力側近である釣閑斎の名前を誤記したりするとは考えられないのではないか。無論、一般論としては、誤記する可能性が全くないとは言えない。がしかし、一点しかないことからすれば、その可能性は殆どないと言ってよからう。

次は、この勝頼書状と次の三浦右馬助充の（天正三年）五月二十日付武田勝頼書状（『山梨県史』資料編4 中世

1 県内文書、一四七一号、『戦国遺文 武田氏編』第四卷、二四八九号）の比較・検討である。

当陣之様子無心許之旨、態飛脚祝着候、万方属本意候之間、可為安堵候、然者長篠之地取詰候之处、信長・家康為後詰雖出張候、無指儀及対陣候、敵失行之術、一段逼迫之躰候之条、無二彼陣へ乗懸、信長・家康両敵共、此度可達本意儀、案之内候、猶、其城用心別而可被入于念儀、可為肝要候、恐々謹言、

追而、両種到来、喜悦候、

五月廿日

勝頼（花押）

三浦右馬助殿

見られる通り、追而書と充所を除くと、ほぼ同文である。三浦右馬助員久の場合、この時点では、駿河の田中城を守っており、<sup>(28)</sup>勝頼に陣中見舞いをするにふさわしい。内容的にも疑問点はないだろう。

同一日付・同内容の文書はないわけではない。しかし、そうした文書は、定書・制札・高札・法度などのように一度に同内容を布達したりする場合のものであり、このような書状では殆ど見られないのではないか。

そこで、この三浦右馬助充と「長閑斎」充の武田勝頼書状の原本を熟覧することにした。両方共、『山梨県史資料編』に写真が掲載されているので、三浦右馬助充の方は写真版（『山梨県史 資料編』4 中世1 別冊写真集、一二三頁）で済ませることにし、拡大コピーを作ったりして観察した結果、原本と見て間違いないと思われる。

「長閑斎」充の武田勝頼書状の方は、幸いにも現在「東京大学史料編纂所蔵文書」となっており、原本を閲覧することが出来た（なお、これも『山梨県史資料編』5 中世2 別冊写真集、一八五頁に写真が掲載されている）。鴨川達夫所員のご好意によって、じっくりと原本を観察することが出来たのは有り難いことであった。

熟覧した結果としてのわたしの判断では、この文書は写しであって、原本ではない。<sup>(29)</sup>この判断は、墨継ぎの自然さからしても間違いないと思われる（例えば、「長閑斎」の「長」の墨継ぎなど随所に疑問点がある）。『山梨県史資料編』別冊写真集の両文書を注意深く比較しても、両者の違いは明瞭になるだろう。写した時点は、天正三年五月二十日では有り得ない。すなわち、五月二十日当日に、この「長閑斎」充武田勝頼書状が、先に書かれた三浦右馬助充の勝頼書状を横目に見つつほぼ同文で作られたとは、到底考えられない。

わたしの判断では、これは別の時期・機会に作られたものであり、前述したように充所に「長閑斎」と書いてある

問題点からすれば、明白な偽文書と思われる。われわれは「長閑斎」と書かれていることに違和を感じないが、それは『甲陽軍鑑』がもつばら「長閑斎」と書いているからなのである。

すなわち、この文書は次のような疑点を抱えていることになる。

第一に、勝頼の側近として活躍していた長坂釣閑斎は勝頼に同行して長篠に来ていた可能性が高いのに、この文書ではどこかの城を守っていたことになっている。一体、どの城にいたというのであろうか。

第二に、武田勝頼書状の充所に「長閑斎」と誤記されているが、残存文書を検討した結果として、勝頼の側近として重用されていた長坂釣閑斎のことを、「長閑斎」と誤記することはまず考えられない。

第三に、原本を熟覧しての判断では、この勝頼書状は原本ではなく、後の時期の写しである可能性が極めて濃厚である。

第四に、同日付の三浦右馬助充武田勝頼書状（原本）と「長閑斎」充武田勝頼書状は、ほぼ同文である。恐らく、この三浦右馬助充の書状の本文を写すことによって作られた文書なのではあるまいか。

すなわち、以上の四点を合わせ考えると、この「長閑斎」充武田勝頼書状は、単なる写しではなく、三浦右馬助充の武田勝頼書状を写し、かつ充所に「長閑斎」と書いた偽文書である可能性が極めて大だということになる。

なお、「釣閑斎」のことを「長閑斎」と頻繁に書いているのは『甲陽軍鑑』であるから、あるいは同書が版行されて以後（寛永以降）に作られた偽文書なのではあるまいか。<sup>30</sup>

とすれば、この文書の存在ゆえに、長篠の戦いにおいて『甲陽軍鑑』の記すような武田軍の軍議はなかった、との結論を導き出すことは出来ない。

ところで太向は、最近、⑧の『『甲陽軍鑑』研究の現状と課題』を発表している。酒井の『甲陽軍鑑大成』の成果

を批判的に検討しているので、最後に、その紹介と批判を行うとしよう。

まず太向は、⑦で酒井の業績を次のように位置づける。すなわち、『甲陽軍鑑大成』は、国語学・言語学研究のテキスト・報告書として編まれたものだが、歴史研究にも大きな一石を投じた。それは、①原本により近づくための伝本の探究とそれに基づく研究の必要性、②使われている言葉（言語相）の分析による成立事情（年代や執筆相）の推定の必要性などを、綿密な調査・分析によって説得力をもって示してくれたとし、とくに「室町語による口語的要素が強い」との分析に基づいた「著者Ⅱ高坂弾正の口述」論や「筆録者Ⅱ猿楽師大蔵彦十郎・高坂の甥春日惣次郎」論は、鮮烈な問題提起となったと評価する。

しかし、『甲陽軍鑑大成』の刊行後、歴史学の側に新しい『甲陽軍鑑』研究の動向が生れたかと言えば、第Ⅳ期を通じて特筆すべき動きは存在しない。何故かと言えば、国語学には門外漢の歴史研究者たちにとっては、酒井の文法や音韻・語彙などを扱った研究を自らの仕事のなかに受け入れることが困難であったことなどを挙げている。

そこで太向は、酒井の業績を歴史研究上の課題に翻訳・整理することを試みる。紙幅の関係で紹介を略すが、その結果、まず酒井の版本・写本研究の意義を示し、「最も原本に近い写本」を特定した結果としての『甲陽軍鑑大成』の本文篇・索引篇は、今後の『甲陽軍鑑』の利用・研究の基本文献であるとする。次に、酒井の国語学的研究に踏み込み、『甲陽軍鑑』の原本が、「口述筆記」もしくは「口頭語を駆使した筆録」を基礎にして作られていることを明らかにしたと指摘し、『甲陽軍鑑』は、i主に室町末期の言葉で、口頭語をベースにして書かれたものであり、iiかなりの破損した状態の伝本を小幡景憲が入手して写したものであり、そのことは『甲陽軍鑑末書』下巻上の断り書きと符号すると、酒井が仮説を示していることを紹介する。

では、太向は、酒井の所論をどう受けとめるのか。「謎の書物」のように扱われてきた『甲陽軍鑑』に対し、酒井

の研究だけで結論を固めてしまうのは早急だとして、次の四点の疑問点を示す。

第一点は、『甲陽軍鑑末書』で語られている「高坂口述、大蔵・春日筆録」という著述のあり方が、『甲陽軍鑑』本篇には一言も記されていないのは何故か。

第二点は、高坂の名の記述に違いのあるのは何故か。

第三点は、近世以来『甲陽軍鑑』批判の根幹であった歴史事実（とくに年代）の誤りや架空の出来事の創作を、どのように解釈をすればよいのか。

第四点は、本文中に載録されている「偽文書」の存在をどう解釈すべきか。

しかし、これらは、酒井に問うべき疑問点でないことは言うまでもない。歴史研究者の側は、酒井の仮説を受け入れるならば、その線で右の諸点を検討すべきであるし、受け入れないのであれば、酒井の仮説をきちんと批判すべきなのである。

わたしに言わせれば、第一点は直ぐに説明できるレベルの問いであり、<sup>31</sup>第二点はすでに三で基本的な考え方を述べた。第三点については、長篠の「武田軍の軍議」に釣閑斎はいなかったとする高柳や太向の『甲陽軍鑑』批判が、成り立たないであろうことを前述した。第四点についても、『甲陽軍鑑』に引用されている文書や法度等々の諸史料の全面的検討と見直しは、それこそ戦国史研究者たちのなすべき課題なのである。

ここまで『甲陽軍鑑』の研究史を辿ってきた限りでは、歴史研究者たちの従来の「結論」には、再検討を必要とする点が多い。酒井の書誌学的・文献学的成果を踏まえて、『甲陽軍鑑』のテキスト論・史料論に本格的に取り組むことは、歴史研究者（とくに戦国史研究者）の喫緊・緊急の仕事であろう。

## 結びにかえて

本稿は、あくまで『甲陽軍鑑』の史料論を開始するための研究史の初步的な検討作業であった。今後研究史の批判を続行する必要があることは言うまでもない。

しかし、本稿の限りでも、第一に、「東京帝国大学教授」田中義成「博士」の論文「甲陽軍鑑考」以来の「定説」なるものが、なんとも脆弱な基盤の上に立つ一仮説に過ぎず、しかも、『甲陽軍鑑』とはどのような性格の史料なのかという基本的な解明を怠った「定説」であったことは明瞭であろう。しかも、その「定説」の不十分さにもかかわらず、極論としての「偽書」・「虚構」論さえ再生産され続けてきたのであった。もしも、戦国史研究者たちが、『甲陽軍鑑』理解をこのまま放置し続けるなら、その怠慢は救いがたいと言わねばなるまい。

第二に、豊穰かつ複雑なテキストである『甲陽軍鑑』の史料性格をめぐる研究は、酒井憲二の書誌学的・文献学的・国語学的研究の成果である『甲陽軍鑑大成』全七巻によって、漸くその緒についたと見るべきである。へ一六世紀史の研究は、その業績を「つまみ食い」的に利用するだけでなく、酒井の仮説を真摯に受け止め、それと格闘していくことを当然かつ緊急の課題とすべきであろう。

第三に、酒井が指摘したような口述・口語りを筆記した性格の強い『甲陽軍鑑』のようなテキストについては、年代記的な意味での正確さを基準にして、その「史書」としての失格を宣言すること自体が、そもそも不適切であり、間違った物差による判断に他ならない。今後の『甲陽軍鑑』の史料論は、『軍鑑』の数多く誤謬を、たんに「誤りである」と指摘するのではなく、いかなる性質の誤謬なのかを明らかにしていくべきである。<sup>32</sup> 酒井が主張するように、高坂弾正・大藏彦十郎・春日惣次郎が著者であれば、その誤謬は、①高坂らのたんなる記憶違いなのか、②かれらの



口語りや物語化のせいなのか、③かれらの情報収集のさまざまな制約によるものなのか、などといった判断が求められるし、小幡景憲が「綴輯者」ないし著者であるとする論者にとっても、同様の誤謬論が必要不可欠であろう。

そして第四に、これまでの戦国史研究者の研究は、従来型の政治史の諸テーマに絞られがちであり、『甲陽軍鑑』の利用の仕方には決まったパターンがあった。しかし、それではなるまい。『甲陽軍鑑』論を豊かにしていくためにも、それを活用しなければ出来ないような新鮮な研究課題を数多く生み出していくべきなのである。そもそもの史料が良い史料であるかはテーマ依存的であり、伝統的なテーマを乗り越え、新たな視野・視角や課題と方法を持たない者には、『甲陽軍鑑』やそれに類する史料の魅力の発見と、それへの挑戦の意欲は決して生れてこないだろうと言いたい。

わたしが今後試みようと考えているアプローチは、酒井の国語学的・書誌学的アプローチに対して、「史料論」的アプローチである。より限定的に言えば、〈一六世紀史〉研究のための最も魅力的な切り口の一つとしての「文学史料論」的アプローチであり、いわゆる軍記物語などを「史料論」のなかに如何に位置づけるべきか、それらの叙述はどのように歴史研究に生かしていけるかについても考えていくことになる。この挑戦は容易ではなく、牛歩の歩みとなるだろうが、絵画史料論と並行させて取り組んでいきたい。

〔付記〕本稿は、科学研究費補助金基盤研究（S）「中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究」の二〇〇六年度の研究成果の一部である。

- (1) 文学史料論の試みとしては、五味文彦・高橋昌明・保立道久・山室恭子らとわたしの仕事Ⅱ試みなどがある。戦国から近世前期にかけての軍記物語を活用した試みとしては、『信長記』『太閤記』などを扱った山室恭子のユニークな仕事に興味深い。「太閤記は史学に益あり」(『中世をひろげる 新しい史料論をもとめて』、吉川弘文館、一九九一年)、『黄金太閤』(中公新書、一九九二年)、『群雄創世記』(朝日新聞社、一九九五年)、そして『黄門様と犬公方』(文春新書、一九九八年)を一読されたい。
- (2) この〈一六世紀史〉研究のために立正大学史学科の院生・学生たちは、16世紀史索引シリーズの取り組みを続けており、『信長公記』語彙索引、『細川両家記』索引、『織田信長文書の研究』語彙索引の三冊を完成させた。現在、次の課題として『三河物語』の索引作成作業を開始している。
- (3) 大阪城天守閣の北川央を中心としたスタッフと、同屏風の高精細デジタル画像データベース作りの共同研究を行うことになっている。
- (4) 磯貝正義の③4によれば、今井は長野県岡谷市の出身であり、東京帝国大学の史学概論の講義で、この部分を講じられたのだという(一四三頁)。
- (5) 『大坂夏の陣図屏風』に描かれている武将や軍団の姿を読み解き、それを記述するためには、戦国末期の合戦の語彙・用語を身に付けることが必要不可欠である。
- (6) 例えば、清水克行の好著『喧嘩両成敗の誕生』(講談社メチエ叢書、二〇〇六年)は、『甲陽軍鑑』が喧嘩両成敗を考える上で重要な史料であるにもかかわらず、「後世の軍記物類」であるとして検討対象から外している(二七八頁)。
- (7) 甲斐武田氏や武田信虎・信玄・勝頼を中心とした戦国史研究の文献リストは色々あるが、「柴辻俊六のホームページ」の「武田氏研究文献目録」が便利である。
- (8) 柴辻は、わたしの一年先輩である。一貫して武田氏研究を進めてきたその研究姿勢は見事というしかない。武田信玄に関する代表的な著作としては、『武田信玄―その生涯と領国経営―』(文献出版、一九八七年)や『武田信玄大事典』(編著、新人物往来社、二〇〇〇年)などがある。

- (9) 小和田は、わたしの一年後輩の友人であり、学部時代には同じサークルに属していた。武田信玄に関する著書に『武田信玄 知られざる実像』（講談社、一九八七年）がある。
- (10) 笹本正治の武田氏に関する代表的な著作としては、『武田信玄』（中公新書、一九九七年）と『武田信玄』（ミネルバ書房、二〇〇五年）がある。後者の二八五～二八八頁には、笹本の『甲陽軍鑑』理解が示されているが、「定説」線上に位置するものであり、酒井仮説との格闘は見られない。なお、同書一二頁一七行目に見られる記述は、信玄の伝記としては衝撃的な誤記である。
- (11) 田中の「甲陽軍鑑考」は、磯貝正義・服部治則校注『甲陽軍鑑』下巻の末尾に収録されているので（四七五～四七八頁）、その批判的精読を勧めたい。
- (12) 『甲陽軍鑑』と『尾畑道牛事歴』の文体比較の詳細については、別稿を用意したい。たんなる比較ではなく、小幡景憲の著作・著述へと向かう論となろう。
- (13) 『武田信玄の経綸と修養』（創元社、一九四三年）と「甲陽軍鑑に就て（解題）」『甲斐叢書第四巻 甲陽軍鑑 乾』（甲斐叢書刊行会、一九三三年）を参照。
- (14) 前注（13）に同じ。
- (15) 有馬成甫は、田中が『甲陽軍鑑』をよく読んでいないのではないかとしているが、その指摘は、恐らく当たっている。
- (16) 同様の指摘は、数多の論文・著書に見られる。
- (17) 『国史大辞典』によれば、渡辺世祐は、明治七（一八七四）年三月一日、山口県に生まれる。同三三（一九〇〇）年七月一〇日に東京帝国大学文科国史科を卒業して埼玉県熊谷中学校の教頭となるが、三六年九月に東京帝国大学大学院に入学し、「関東を中心とした足利時代史」を研究。翌年、史料編纂所嘱託となり、三八年九月に文科大学講師、大正四（一九一五）年一二月に史料編纂官になり、昭和一一（一九三六）年三月、停年により退官したが、同一四年まで嘱託として史料編纂に携わった。同七年、明治大学に専門部文科が創設されると教授、史学科長となり、同二四年新制大学となった明治大学に文学部が創設されると、文学部長となった。同三二年四月二八日、八三歳で没した。
- (18) 渡辺の挙げた『甲陽軍鑑』の十一点の評価すべき点は、あくまで「定説」を前提としたものである。

(19) 「神田孝平氏所蔵文書」とあるのは、後述する「長閑齋」充の（天正三年）五月二十日付武田勝頼書状のことである。高柳は、この文書を史料編纂所の影写本で見ているのであろう。

(20) 田中説を一面的に捉えているだけでなく、『石水寺物語』を『石清寺物語』とするといった誤りもある。

(21) 磯貝らの②『甲陽軍鑑』は、『甲陽軍伝解』との異同が示されているので大要役立つのだが、反面、『甲陽軍伝解』の補入によって意味が取りにくくなった場合がある。問題の部分は、まさにその典型的な例であろう。

(22) 「春日」・「香坂」・「高坂」弾正については、別稿を用意する予定である。

(23) わたしは、『日本兵法全集1 甲州流兵法』（人物往来社、一九六七年）に収録されている小幡景憲の著作の検討から始めている。

(24) 新しい発想や課題が、既存史料の新たな読みを可能にする。というより、新たな研究課題とその広がり、既存史料を新しい世界へと変えてしまうのである。

(25) 酒井の略歴や編著書論文目録などについては、酒井憲二『老国語教師の「喜」の字の落穂拾い』（笠間書院、二〇〇四年）をご覧ください。

(26) 酒井の主張中で最重要点の一つは、末書四冊が『甲陽軍鑑』全二三冊に含まれるとする刺激的な仮説なのであるが、その点に正面から向き合い、明解な見解を示した日本史（戦国史）研究者を、わたしは知らない。

(27) 作成した表は、紙数の制約により割愛した。別の機会に示したいと考えている。

(28) 『戦国人名辞典』などを参照。

(29) 鴨川達夫のご教示によれば、この文書は、二〇〇一年十二月十一日～二〇〇二年一月二十七日に東京国立博物館平成館において開催された特別展「時を超えて語るもの」（東京大学史料編纂所史料集発刊一〇〇周年記念）に出陳された。その準備に際して、同文書を見た史料編纂所同僚の橋本政宣は、写しであるとの判断を示したと言う。わたしもそう思う。

なお、橋本の⑧論文「正親町天皇宸筆の武田信玄書状」は、古くは渡辺世祐が信頼できると指摘していた武田信玄書状について綿密な検討を行ったものであり、これによって同書状は安心して利用できるようになったと思われる。『甲陽軍鑑』にも収められた興味深い文書の一つがその信憑性を明らかにされたわけである。但し、『甲陽軍鑑』十三巻には、同文書に反論し

て書かれた織田信長申状写が収められている。橋本は、この信長文書についても「同じ次元で論ずることには躊躇があるが」としつつ、検討を加えている。しかし、その論旨は微妙である。すなわち、「ここに見える内容、極めて面白いもので、さして史的矛盾は見当たらない。ことさらにいえば、「大俗の身として大僧正号の事、其例を聞かず」とあることを掲げよう」とする。信玄は「権僧正」であったようだからである。しかし、『天正玄公仏事法語』では「権大僧正位」ともあるから、大僧正との伝聞があったとしても不思議ではないともいえるかもしれないとし、「問題は「天正元癸酉年」とあり、信長の署名の右肩に「右大臣」とあることである」とする。「天正の改元は元龜四年七月二十一日のことであり、信長の右大臣任官は天正五年十一月二十日、六年四月九日辞任であるから、共に全く矛盾するのであり、一般的にいえば、これらは偽文書の根拠とされるものである。信長文書の集大成である奥野高広の『織田信長文書の研究』でも本文書を収録していないのも当然であろう。しかし、書状形式のこのような文書に年紀を記さないことが一般的であるから、転写の過程で書き込まれた可能性もある。また、右大臣の肩書も、文書を偽作するにしてみても間が抜けているといえよう。従ってこれらは偽文書の決め手とはなしたがたいともいえよう。しかしこのような点がある以上、正文書と言いつても認めざるを得ない。」と述べる。「正文書」とは何か、わたしにはよく分からないのだが、橋本の推論によれば、この信長文書は内容的に疑うべき点は見当たらず、形式的にも「写し」であればクリアーできる難点しかない。とすれば、この信長文書も内容的な信憑性を認めてもよいことになるだろう。天正改元と右大臣のいずれも、「写し」であれば十分に有り得ることなのであるから。『甲陽軍鑑』にしか収められていないが故の躊躇のように、わたしには思える。

(30) 偽文書だとすると、何のために作られたかが問題となるが、今のところ明解な見解を示すことは出来ない。もしかすると、『甲陽軍鑑』を貶める意図が考えられないであろうか。さらに調べを進めたいと思う。

(31) 『甲陽軍鑑』執筆のプロセスを調べて行けば、その答えが見つかるはずである。

(32) 『甲陽軍鑑』の誤謬論が今後の大きな課題である。『軍鑑』の誤りをただ指摘するだけであつたり、『軍鑑』作者の「作為」「創作」「仮託」「混乱」を乱暴に断定しているだけでは、もはや済まない。『軍鑑』のさまざまな誤謬が、それぞれどのようなものなのかを明らかにしていくべきであろう。一般的に言えば、古い時期の出来事については年月日が正確なことは当然であり、誤っているからといって近世初期の記述だとは簡単には言えない。

本稿の読者に問いたい。十年、いや二十年前の出来事をあなたはどのくらい正確に語れるであろうか。そのことが起こった年月日を正確に記述できるであろうか。また、他人から聞いたことを、いちいち調べて記録しておくだろうか。『甲陽軍鑑』は繰り返し、自らの記述に誤りのあることを断っているのである。

(二〇〇六年八月二三日受理、八月二五日採択)